

# 千葉県中近世城跡研究調査報告書

## 第 8 集

—飯野陣屋跡・山崎城発掘調査報告—

昭 和 62 年 度

財団法人 千葉県文化財センター

## 序 文

千葉県内には、数多くの中近世遺跡が所在し、それらにまつわるさまざまな史実伝承も伝えられています。千葉県教育委員会では、それらをは握するため昭和45、46年度に中近世遺跡の分布調査を実施しました。その結果、県内586か所の所在を確認し、「千葉県中近世遺跡調査目録」として刊行しました。その中で、城館跡に関しては、文献史料による研究がかなり進められておりますが、規模・構造・性格等の実態調査はほとんどおこなわれていながら実情です。

そこで、千葉県教育委員会では、昭和55年度から第一次 5か年計画、昭和60年度から第二次 5か年計画で、中近世城館跡のうち重要性が高くかつ開発等の影響を受ける恐れがあるのものを選び、その規模、構造等をは握し今後の保存及び活用を講じる資料を得る目的で、測量・確認調査を実施してきました。

今年度は、富津市飯野陣屋跡・佐原市山崎城跡の2か所について調査を実施し、それらの主要部について、規模、構造等を明らかにすることができました。

このたび、その発掘調査成果が調査概報として刊行する運びとなりました。本報告書が学術的資料としてはもとより、文化財保護・活用のため広く一般の方々にも利用されることを期待しております。

終りに調査に当たり多大な御協力いただいた富津市、佐原市両教育委員会をはじめ地元関係者の方々、調査を担当された財団法人千葉県文化財センターの職員及び調査補助員の方々の御苦労に対し、心から感謝の意を表します。

昭和63年 3月31日

千葉県教育庁文化課長

竹内 一雄

## 例　　言

1. 本書は、富津市下飯野所在の飯野陣屋跡（遺跡コード226-003）及び佐原市香取丁子所在の山崎城（遺跡コード209-039）の確認調査概要報告書である。
2. 本事業は、千葉県教育委員会が国庫補助を受けて、調査を（財）千葉県文化財センターに委託し実施したものである。
3. 調査は、飯野陣屋跡が昭和62年11月5日～11月12日、山崎城が昭和62年11月18日～11月30日まで実施した。なお、地形測量は京葉測量株式会社に委託し実施した。
4. 調査および整理作業・報告書作成作業に当たっては、研究部長 堀部昭夫、部長補佐 渡辺智信・古内茂のもとに主任調査研究員 鳴田浩司が担当した。
5. 執筆は鳴田浩司が担当した。なお、整理作業に当たっては柴田龍司の協力を得るところ大であった。
6. 調査の実施に当たって、飯野陣屋跡については、富津市教育委員会の関係者各位、土地所有者萱野一幸氏・萱野喜久江氏・君津共同火力株式会社・島野由藏氏・鈴木博氏・牧野さだ氏・宮本浅次郎氏、並びに地元下飯野地区のご協力があった。また、山崎城については、佐原市教育委員会の関係者各位、土地所有者篠塚政顕氏・名上誠美氏、並びに地元丁子地区のご協力があった。各々記して謝意を表します。
7. 本書に利用した方位はすべて座標北である。
8. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の50,000分の1の地形図 佐原（N I - 54 - 19 - 9）、潮来（N I - 54 - 19 - 1.5）、木更津（N I - 54 - 25 - 4）、富津（N I - 54 - 26 - 1）である。なお、飯野陣屋跡地形測量に当たっては富津市発行の「富津市二間塚土地区画整理事業現況図」を活用させていただいた。
9. 調査の実施および本書をまとめるにあたり、下記の方々より種々の御教示・御協力を賜った。各々記して謝意を表します。（敬称略）  
八田英夫・楢山林繼・（財）君津都市文化財センター・大原徳重・多田悦造・國學院大学図書館・富津市都市計画課・遠山誠一・原田享二・及川淳一・野口行雄・豊巻幸正・小沢洋・中村博・藤岡孝司・牛房茂行・平野雅之

# 目 次

序文

例言

## I 富津市飯野陣屋跡

1. 飯野陣屋跡の位置と地理的環境.....	1
2. 飯野陣屋の研究略史.....	1
3. 飯野陣屋跡の概要.....	3
4. 発掘調査とその概要.....	9
(1) 調査経過とその方法.....	9
(2) 調査区の概要.....	9
5. 結語.....	18

## 挿 図 目 次

I - 1 図 飯野陣屋跡位置図.....	2
I - 2 図 飯野陣屋跡地形測量図.....	5
I - 3 図 飯野陣屋跡概念図・トレンチ配置図.....	7
I - 4 図 飯野陣屋三の丸跡（三条塙周辺）発掘区平面図・断面図.....	12
I - 5 図 飯野陣屋本丸跡発掘区平面図・断面図.....	13
I - 6 図 飯野陣屋跡出土遺物実測図.....	15
I - 7 図 飯野陣屋跡出土遺物実測図.....	16
I - 8 図 飯野陣屋跡出土遺物実測図.....	17

## 図 版 目 次

図版 I - 1 飯野陣屋跡航空写真

図版 I - 2 飯野陣屋古絵図（國學院大学図書館所蔵）

図版 I - 3 飯野陣屋古絵図（國學院大学図書館所蔵）

図版 I - 4 飯野陣屋跡遠景

図版 I - 5 飯野陣屋跡三の丸（三条塙前方部南側）確認遺構

図版 I - 6 飯野陣屋跡三の丸（三条塙後円部東側）確認遺構

図版 I - 7 飯野陣屋跡本丸（B<sub>1</sub>, B<sub>2</sub>トレンチ）確認遺構

図版 I - 8 飯野陣屋跡本丸（D<sub>2</sub>トレンチ）確認遺構

図版 I - 9 飯野陣屋跡本丸（D<sub>1</sub>, D<sub>3</sub>トレンチ）確認遺構

図版 I - 10 飯野陣屋跡出土遺物

図版 I - 11 飯野陣屋跡出土遺物

図版 I - 12 飯野陣屋跡出土遺物

## II 佐原市山崎城

1. 山崎城の位置と地理的環境.....	47
2. 山崎城の歴史的環境.....	47
3. 山崎城の概要.....	51
4. 発掘調査とその概要.....	55
(1) 調査経過と方法.....	55
(2) 調査区の概要.....	55
5. 結語.....	60

## 挿 図 目 次

II - 1 図 山崎城と周辺の主要城跡位置図.....	48
II - 2 図 山崎城地形測量図.....	52
II - 3 図 山崎城概念図・トレンチ配置図.....	53
II - 4 図 山崎城郭部発掘区確認遺構.....	56
II - 5 図 山崎城郭部発掘区確認遺構.....	58
II - 6 図 山崎城帯曲輪・城下集落地区発掘区確認遺構.....	59
II - 7 図 山崎城出土遺物実測図.....	60

## 表 目 次

表 1. 古銭一覧表 (E トレンチ出土) .....	61
-----------------------------	----

## 図 版 目 次

図版 II - 1 山崎城航空写真

図版 II - 2 山崎城遠景

図版 II - 3 山崎城土壘・腰曲輪

図版 II - 4 山崎城帯曲輪部発掘区・遺物出土状況

図版 II - 5 山崎城郭部発掘区確認遺構

図版 II - 6 山崎城郭部発掘区

図版 II - 7 山崎城出土遺物

# I 富津市飯野陣屋跡

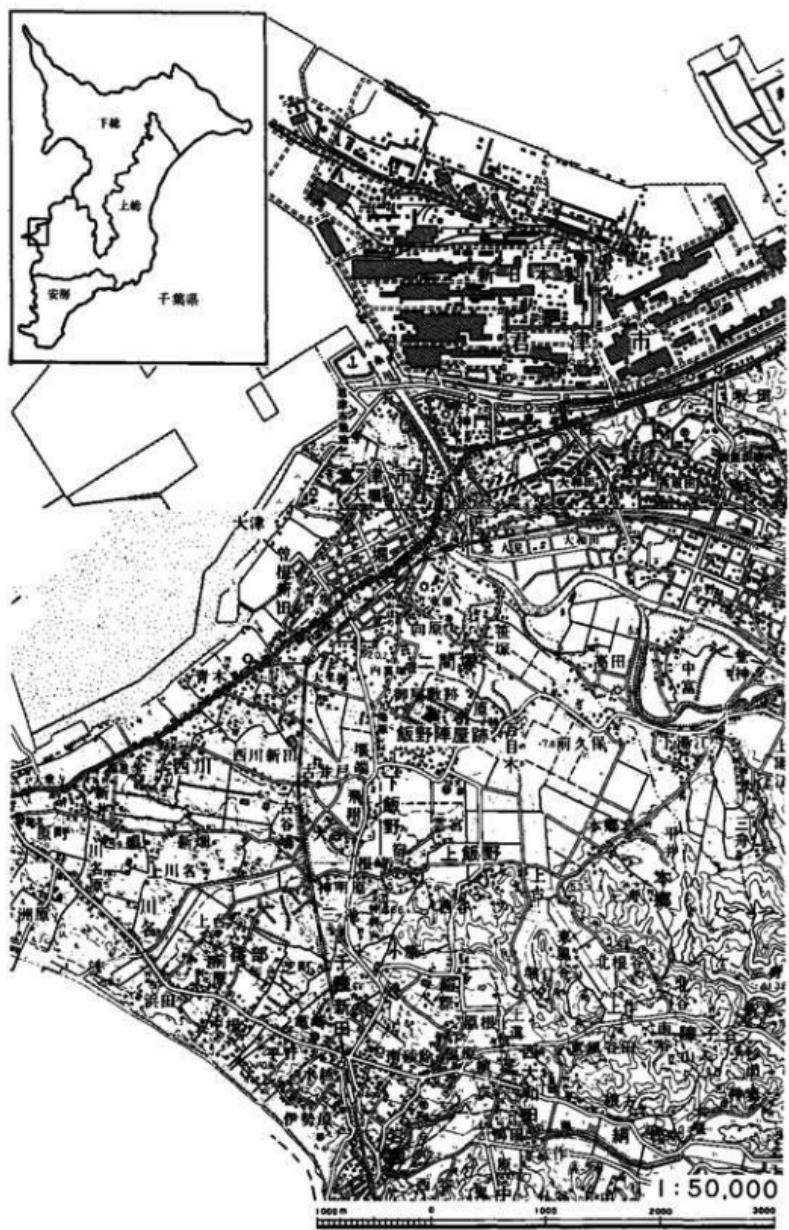
## 1. 飯野陣屋跡の位置と地理的環境

飯野陣屋跡は、富津市下飯野に所在する。富津岬の東北東7.5kmの方角で、JR 東日本内房線青堀駅より南へ1kmの所に位置し、標高7~8mの小糸川下流域の沖積地上に立地する。小糸川は元は古谷場から川名を経て内房の海に注いでいたが、土砂の堆積と地盤運動によって小糸川の川床勾配がなくなり、流路が次第に北に移動し、現在では河川改修によって大堀方面へ北流するようになった。また、青堀駅の北側を走る国道16号線に沿って内陸寄りには砂丘列が発達している。飯野陣屋は内裏塚古墳群中の三条塚古墳と稻荷塚古墳を内包しているが、これらの古墳群はこの砂丘列上に立地していたと考えられている。それは古墳の主軸方向が海岸線に平行していることからも想像できる。ただ、陣屋がなぜ三条塚古墳と稻荷塚古墳を内包した土地に築かれたか、その自然地理的要因は定かではない。飯野陣屋の築造された基盤層は灰白色の砂層であり、部分的には鉄錆の沈着により茶褐色を呈するところもある。また、旧表土が残存している部分では、旧表土が泥炭化しており、現在もなお冠水するレベルにあることから、築造以前は広い範囲で湿地帯となっていたであろう。

## 2. 飯野陣屋の研究略史

飯野陣屋は江戸時代には、長州徳山・越前敦賀のものと並んで日本三（大）陣屋と称されていたといふ。このことについての文献・絵図等で、江戸時代に記されたものを未だ実見したことはない。飯野陣屋についての最も古い文献は「上総国町村誌」<sup>①</sup>であろう。この資料には飯野陣屋の築造時期については、「寛永8年」と記されている。寛永8年は初代藩主保科正貞が（この時期はまだ飯野藩の藩主ではない）米三千俵で召し出された年から2年後である。同じ築造時期については以後、「寛永6年」<sup>②</sup>、「元禄年中」<sup>③</sup>、「慶安元年」<sup>④</sup>の説が出されたが、特に具体的な資料はないものの、現在では「慶安元年」の説が最も有力視されている。この年（1648）は保科正貞が大阪城番を命じられ、摂津で1万石の加増を受け、大名となった年である。（同じ年に摂津国豊島郡浜村に陣屋を設けている）

これまで史蹟的な紹介や、保科家の系譜的な調査はなされてきたが、考古学的な調査や城郭史的研究は極く最近になって注目され始めた。飯野陣屋の最初の考古学的調査は昭和56年の稻荷口遺跡<sup>⑤</sup>であろう。この調査では特に遺物や遺構は検出されなかったようで、報告書のまとめには「約400坪の屋敷の内ではあっても、掘立柱、井戸等遺構として残るものがない地域であったといえよう。」と記載されている。ただ考古学的成果はなかったものの、保科家飯野藩と陣屋の構造については簡潔かつ明瞭に記述されている。これより14年前には陣屋の外濠が県の史蹟



I-1図 飯野陣屋跡位置図

として指定された。昭和59年にはこの濠の発掘調査が実施された<sup>⑤</sup>。この調査は外濠の復旧および環境整備計画に伴うもので、調査の結果濠及び土塁の断面の資料が得られ、また濠内より江戸末期から明治に至る遺物（陶磁器）が多量に出土した。また、飯野陣屋が内裏塚古墳群中に含まれ、かつ陣屋内に三条塚（前方後円墳）と稻荷塚（方墳？）の両古墳が所在する（稻荷塚はすでに削平されている）こともある、この古墳群の研究史中にも登場することがある。特に三条塚外周溝の存在と陣屋の外濠との関係については以前より論じられてきたようである<sup>⑥</sup>。

一方城郭史的な研究では植竹好明氏が陣屋紹介文<sup>⑦</sup>の中で比較的深く論及されている。氏は陣屋が当時のものとしては余りにも規模が大きいこと、藩の石高を見てもこの規模の陣屋を維持していくのが困難なことを考慮して、「歴史的に段階を追ってこの長大な囲郭を持つ城址の存立期を見ていくならば、その初期においては、豪族の館が中核として存在する何らかの共同体の全体的防衛を目的として出発し、統いて戦国期には折邪・逆乙字型堀切などの当時の新しい繩張りが付加され、最終段階に入って、江戸時代に陣屋としてその築造構が利用された。このため、陣屋という呼称がそのまま一般化したのではなかろうか。」と述べられている。この説を考古学的に証明しようとするならば保科氏が飯野藩主となる以前の遺物や遺構の検出が必要となろう。今回も部分的な確認調査であり、何れにしても本格的な調査がこれから課題であろう。

### 3. 飯野陣屋跡の概要

飯野陣屋跡については八田英夫氏によりすでに報告がなされている<sup>⑧</sup>が、今回その報告文に基づき測量調査の結果を踏まえてより詳細に検討してみたい。なお、報告するにあたり、とりあえず陣屋を「内部」、「外部」に分け、更に内部を「本丸」「二の丸」「三の丸」「外濠と土塁」と分類した。

#### 「内部」

県指定史跡となっている外濠に囲まれた地区。面積は128,000m<sup>2</sup>（外濠外縁以内）である。

#### 〈本丸〉

小字を本丸といい、長軸（内濠内側から外濠内側）210m、短軸（同左）160mでほぼ長方形をなす。面積は約34,000m<sup>2</sup>である。南東側中央やや南に大手門（チ）がある。大手門より中央の藩主邸に向かって梯形に土塁がつくられていた（キ）ようであるが、現在では中村博氏宅の築地として一部残存するのみである。本丸と二の丸とは土塁と内濠によって区画されていた。土塁は北隅を中心に内濠に沿って築かれていた（ツ）ようであるが、現在では和田清氏宅の裏に一部残存するのみである。ただ土塁跡は現在でも周囲に比べ若干高いレベルにある。また内濠は東、西両隅と西側中央の飯野神社（サ）参道をのぞいて巡っていた（ケ）ようだが、現在ほとんどが埋立られ、山田留吉氏宅横に水を湛えた状態で一部が残っているのみである。

## 〈二の丸〉

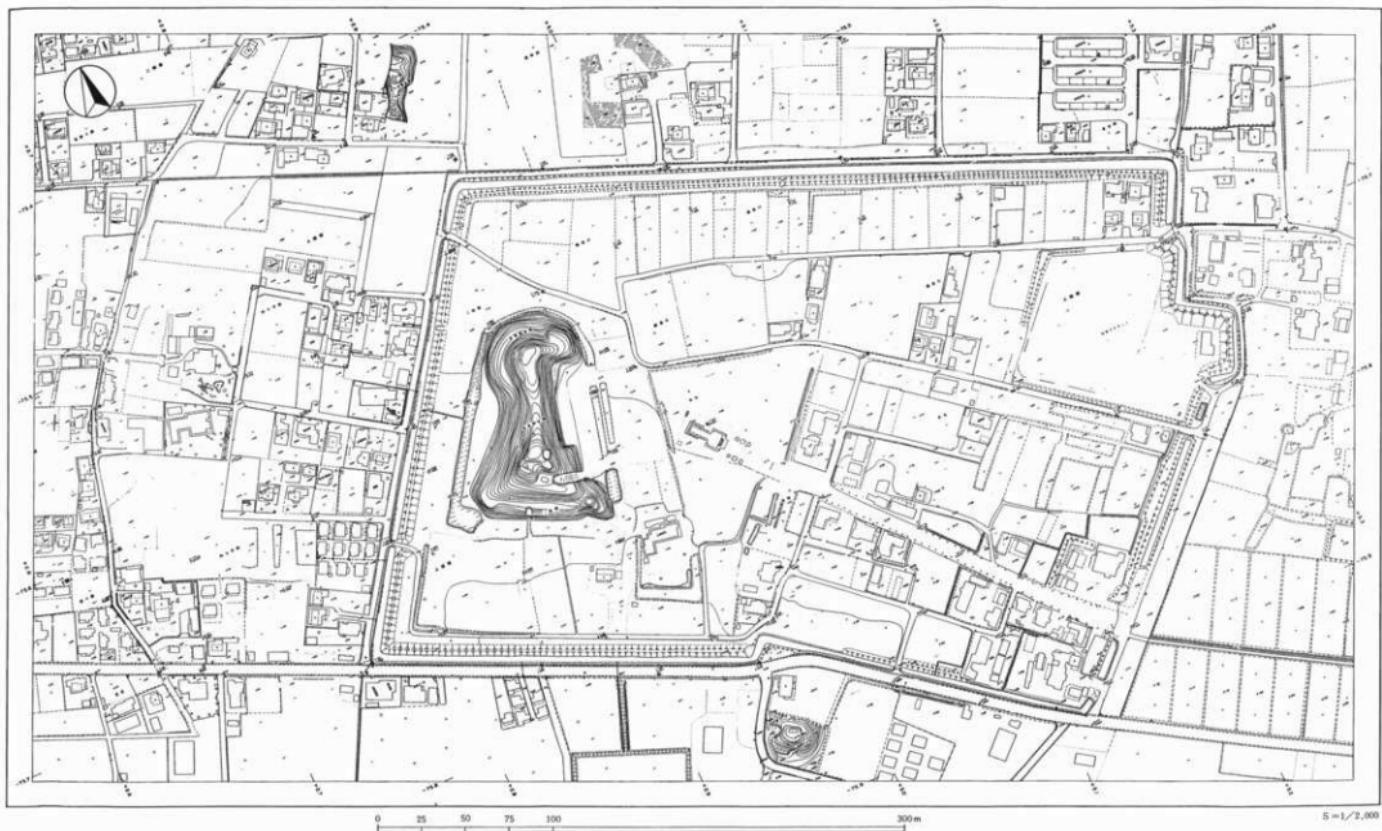
小字は本丸および稻荷口である。稻荷口の名は市営グランド内に以前稻荷神社（カ）があり、その参道がこの付近を通っていたために付けられた名称であろう。内濠が八田英夫氏宅の庭から飯野神社の裏を通って三条塚（シ）の後円部端あたりから大きく南東に屈折して一直線に外濠内側の土壘へ延びている（コ）。この（ケ）と（コ）に挟まれた地区が二の丸に当たる。面積31,000m<sup>2</sup>、標高7.9m～8.3mである。（コ）内濠Bは八田英夫氏宅の庭に痕跡を残すのみで、ほとんどが埋立られている。旧藩時代には藩の重職を務めた家臣が居を構えていた。また、現在の市営グランドの位置には煙硝倉（オ）と稻荷塚古墳（カ）があったが、旧飯野中学校建設時に削平された。飯野神社は三方向を土壘で囲まれていたが、現在では拝殿の後方に一部残存しているのみである。古絵図中の道路については、現在の道路とほぼ一致する。

## 〈三の丸〉

小字は三条塚および稻荷口である。標高は6.6m～8.8m、面積は51,000m<sup>2</sup>で陣屋内部の約4割を占める。三条塚の前方後円のくびれ部には藩校がおかれていた（ニ）。また、前方部南側には武家屋敷があり、藩校と反対側には角場（ス）と呼ばれる施設があったが、後円部周りや、稻荷口一帯はほとんど雜木林だったようである。道路部分は現在のものとほぼ一致する。

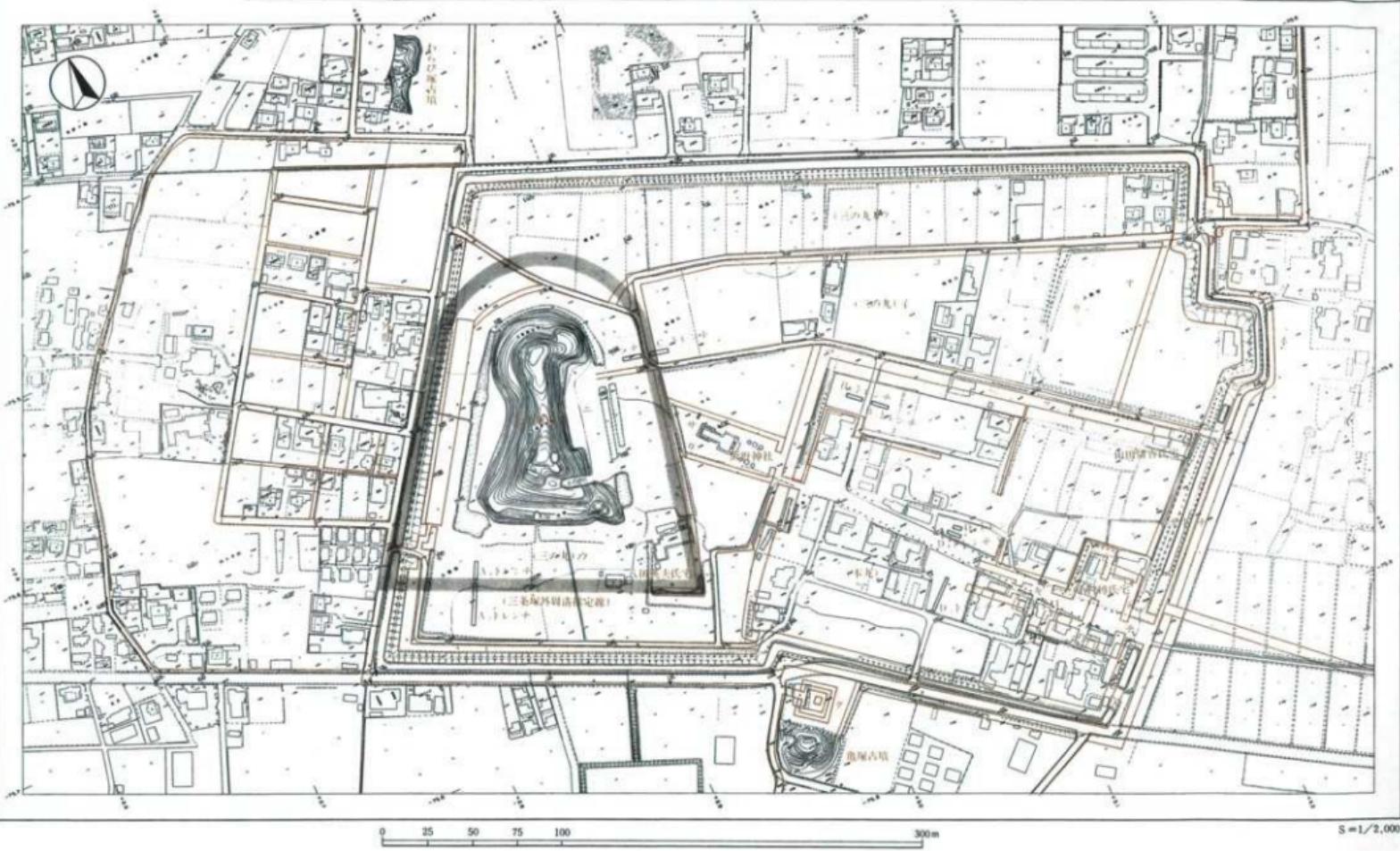
## 〈外濠と土壘〉

陣屋で最も残りの良い遺構は、外濠（ト）とその内側の土壘（テ）である。土壘は総延長1,400m、高低差は内郭と比較して2m前後を計る。外濠は県史跡に指定されている。外濠には現在7か所の出入り口があるが、古絵図には三条塚前方部西側（セ）と本丸南西側中央寄り（ソ）と大手口（チ）の三か所のみ記載されており、その他は明治以降埋立られたものと考えられる。濠の深さは1.2m～2.0m、堤方は地山が砂層であるため断面はU字型をしており、底部の傾斜も緩やかである<sup>9</sup>。土壘は本丸南西側で遺存状況が悪い。外濠は大手門近辺で數か所埋立されているが両遺構とも統じて遺存状況は良好である。三の丸南西側の外濠は三条塚前方部には平行する。また、北西側外濠は三条塚内周溝とほぼ平行する。また、北東側の外濠は南西側の外濠とほぼ平行している。その結果陣屋内部西半分のプランは平行四辺形を呈する。陣屋内部東半分については、南側中央部に屈曲部を1か所（ヌ）、東隅には複雑な屈曲部（ネ）を持っている。またこの部分には外濠の周囲を更に一重の土壘で囲んでいる（ナ）。この土壘は遺存状況が極めて不良で、南側の道路沿いに若干の高まりをもって残存しているのみである。「また樹形と言われるものが2か所ある。一は大手門内側に土壘によって方形に作られたもの（キ）であり、一は大手門を出て、濠に沿って北東に進み、逆乙字形のひずみを曲り切った所で、それに対応するかのように外部に作られた樹形（ク）である。現在もこのあたりの部落は「ますがた」と呼ばれている。道はこの樹形を出て北進し、「おおてばし」を渡って篠塚の部落にはいっている。かつて藩主の参勤交代に用いられた道であるという。」<sup>10</sup>



0 25 50 75 100 300 m

5 = 1/2,000



内部のうち本丸と二の丸、三の丸ではその主軸の方向が異なるため、両者の築造時期に差があるのではないかという見解もある。<sup>④</sup>

### 「外部」

内部の北西側の細い溝（濠）によって囲まれた地域（エ）。面積は48,000m<sup>2</sup>である。内部には上級家臣達の屋敷地があったが、外郭には庶民族の邸宅や長屋があった。その屋敷地の境界や外郭線は現在でも残っており、図面上でも復元できる。

その他、本丸折邪の外側には牢屋（タ）があったことが記載されているが、現在は宅地となり、表面上では遺構は確認できない。この牢屋の南に隣接して龜塚古墳がある。

（注5）（I-7図、30）の鬼瓦は所有者の中村博氏のご厚意により実測させていただいたものである。古絵図からの復元によれば中村氏宅の庭に大手門建物が所在していたようであり、尾号も「御門」ということである。

## 4. 発掘調査とその概要

### （1）調査経過と方法

発掘調査は、昭和62年11月5日から11月12日まで実施した。まず、三の丸のうち三条塙前方部南側に2m×10mと2m×23mの2本のトレンチを設定した。（各々A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>トレンチ）次に本丸の北西隅に2m×9mと2m×10mの2本のトレンチを設定した。（各々B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>トレンチ）そして、三の丸のうち三条塙後円部東側に2m×10mと2m×10mの2本のトレンチを設定した。（各々C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>トレンチ）最後に本丸部に3本のトレンチを設定した。トレンチの規模は各々2m×8m（D<sub>1</sub>トレンチ）、1.5m×20m（D<sub>2</sub>トレンチ）、2m×5m（D<sub>3</sub>トレンチ）である。

発掘調査はトレンチ設定後すべて表土層から手堀で行い、平面観察するとともに、遺構については性格の把握をするため、一部を堀り下げて、堀方および断面を観察した。トレンチは実測・撮影が済み次第すぐに埋め戻しをして、11月12日にすべての現場作業を終了した。

発掘調査の面積は全体で200m<sup>2</sup>である。

### （2）調査区の概要

#### ① A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>トレンチ

小字は三条塙である。三の丸に相当する。三条塙前方部南側に位置し、古絵図<sup>(6)</sup>には、「± 橋川跡 屋敷一畝十歩 添畠五畝二十歩」「± 仙石好真 屋敷一畝十歩 添畠五畝二十歩」と記載されており、橋川氏または仙石氏の土地に当たる。現在では畠として利用されている。この地区の基本的な土層は黒色の耕作土層下に、黒色の砂質土が約30cmの厚さで堆積し、その下は明るい黄褐色の砂質地山層である。A<sub>1</sub>トレンチ中央より北側ではだらだらと下がり、トレンチ端では冠水する。この付近は多少擾乱を受けていると思われる。逆にA<sub>1</sub>トレンチ南側約30cmのところからA<sub>2</sub>トレンチ北端より約5m50cmのところにかけて幅の広い黒色の落ち込みを検出し

た。遺構の幅は堀方上端で8m、下端で6m、深さは確認面より50cmを計測する。覆土は砂質土で、最下層には泥炭化した黒色土の堆積がみられた。この覆土からの遺物の出土はなかったが、この遺構はその位置、方向、堀方から見て、当初予想されていた三条塙外周溝と考えられる。またその南側で、南北方向に走る溝上遺構を検出した。断面観察では2段構成で上段幅1m30cm、下段幅40cm、深さは最下部で確認面より30cmを計測する。覆土は黒色で締まりが強い。出土遺物はないが、陣屋に伴う遺構ではなく、築造以前の遺構と考えられる。

#### 遺物

平瓦、丸瓦、軒丸瓦が1、2層中より多量に出土した。瓦類は表面は黒色、断面が灰白色を呈するものが多いが、逆に表面が白色で内面が灰白色のものも若干含まれる。平瓦には櫛目の入ったもの（I-8図、4）や、固定用の穴があいたもの（I-8図、2）もある。丸瓦には巴文の入った軒丸瓦（I-7図、29）が1点含まれる。他に磁器、陶器、砥石、礫、スレート片、釘等が出土している。これらの遺物も瓦同様すべて1、2層中からの出土である。（I-7図、7）は伊万里染付仏龕具で18C代のもの、（I-6図、11）は行平鍋で19C前半と考えられる。（I-6図、10）は瀬戸・美濃産鉄釉甕で19C前半、（I-7図、13～15）は釘類である。三条塙外周溝とした遺構の覆土からは埴輪や須恵器、土師器等の古墳に伴う遺物の出土はなかったが、隣接の畠で須恵器甕片1点（I-6図、2）を表採した。

#### ②B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>トレンチ

小字は本丸である。B<sub>1</sub>トレンチの西側に本丸と二の丸とを分ける土塁と濠があったようだが、現在では濠は埋立られ、土塁が一部で痕跡を残しているのみである。古絵図中にはこの付近に長屋が立っていたことが記載されている。現在では畠として利用されている。土層は薄い黄褐色の砂地山層の上に薄い灰褐色の耕作土が厚さ25cmで堆積している。地表下50cmで冠水する。B<sub>1</sub>トレンチの大半が擾乱層で、黒色土中に多量の瓦、貝殻、陶器等が混在して廃棄されていた。B<sub>2</sub>トレンチでは東西方向に直線的に延びる溝状遺構が一条検出された。幅は上端で60cm～80cm、下端で20cmの断面逆台形状を呈する。覆土は黒色で、やや泥炭化しており締りが強い。覆土からの遺物の出土はなく性格は不明であるが、陣屋に伴う遺構ではなく、陣屋築造以前の遺構と考えられる。

#### 遺物

B<sub>2</sub>トレンチからの遺物の出土はない。B<sub>1</sub>トレンチからは平瓦、丸瓦、磁器、陶器、壺鉢、土鍋、土師質土器片、土人形（I-6図、20、21）、釘等が出土した。

#### ③C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>トレンチ

小字はC<sub>1</sub>トレンチが三条塙、C<sub>2</sub>トレンチが櫛荷口である。三条塙後円部の東側に位置する。古絵図では三の丸に相当し、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>トレンチを分ける道路も古絵図中の道に一致する。C<sub>1</sub>トレンチの近辺には建物はなかったようであるが、C<sub>2</sub>トレンチは瀬戸家の土地に当たる。古絵図

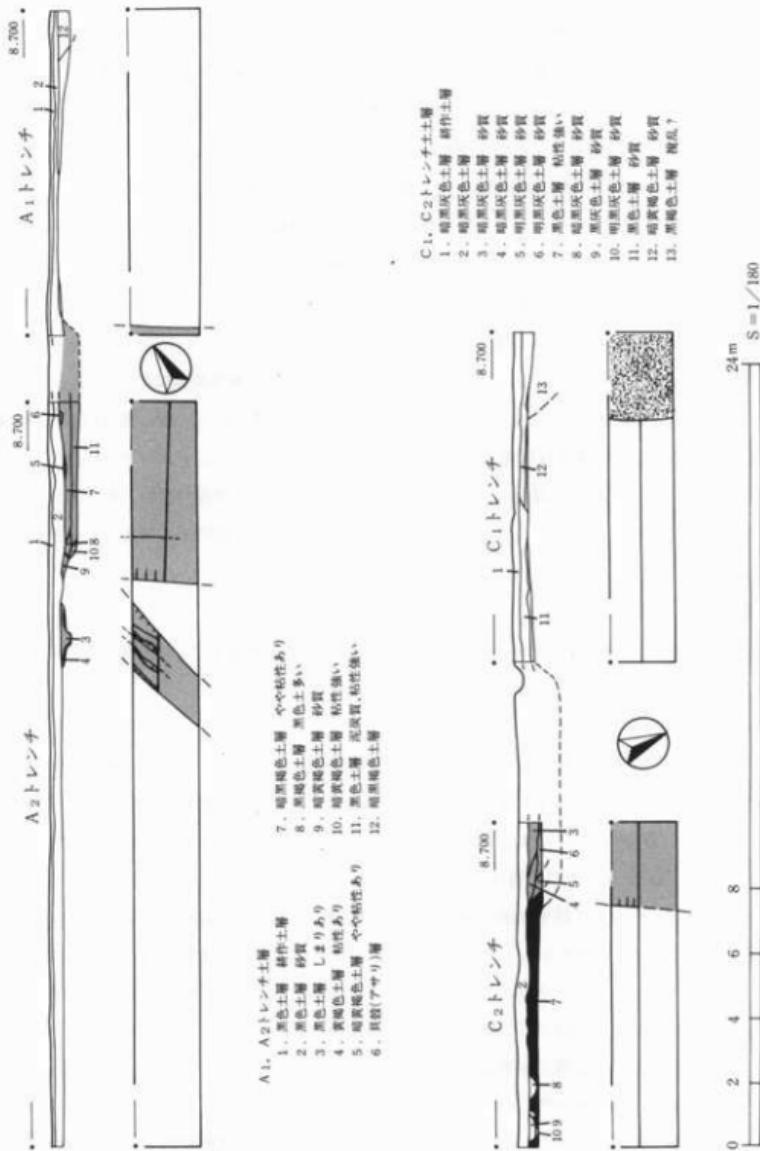
中には「<sup>土</sup> 潑下善方 屋敷一畝十歩 添畠五畝二十歩」と記載されている。現在C<sub>1</sub>トレンチは畠、C<sub>2</sub>トレンチは荒れ地となっている。C<sub>1</sub>トレンチの土層は上から暗黒灰色の耕作土、暗黄褐色の砂層、そして薄い灰褐色の砂地山層の順となる。トレンチ北半はかなり擾乱を受けている。南側では暗黄褐色の砂層が、黒色の砂層に転移する。地山も南側で緩やかに下がり始め、南端では冠水する。C<sub>2</sub>トレンチの土層は暗黒灰色の表土層の下に30cm~40cmの締りの強い黒色土層が広がり、その下は灰白色の粘土地山層となる。黒色土層途中で冠水状態となる。1層は陣屋築造時の盛り土と思われる。陣屋築造以前は溝状遺構を含めて、東側に湿地帯がひろがっていたと思われる。C<sub>1</sub>トレンチには明瞭な遺構は検出できなかったものの、C<sub>2</sub>トレンチでは西端に遺構を検出した。堀方下端については地山が粘土層で、かつ、かなり浅いレベルで冠水するので確認できなかったが、覆土は黒灰色を基調とし、比較的新しい時期に埋められたものと推定される。断面の形態はA<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>トレンチで検出された三条塙外周溝に類似する。古絵図によれば、この地点に古墳の周溝の記載がなく、八田家から古墳に沿って細い溝（内濠）の記載があることから、この遺構は陣屋の内濠と考えられる。ただ、A<sub>1</sub>、A<sub>2</sub>トレンチで検出された外周溝の規模と予想される外周溝の位置を考慮すれば、この溝は古墳外周溝の一部（外縁端）を利用したものと考えられる。なお、外周溝の大半はトレンチ間の道路下にあるものと推定される。

#### 遺物

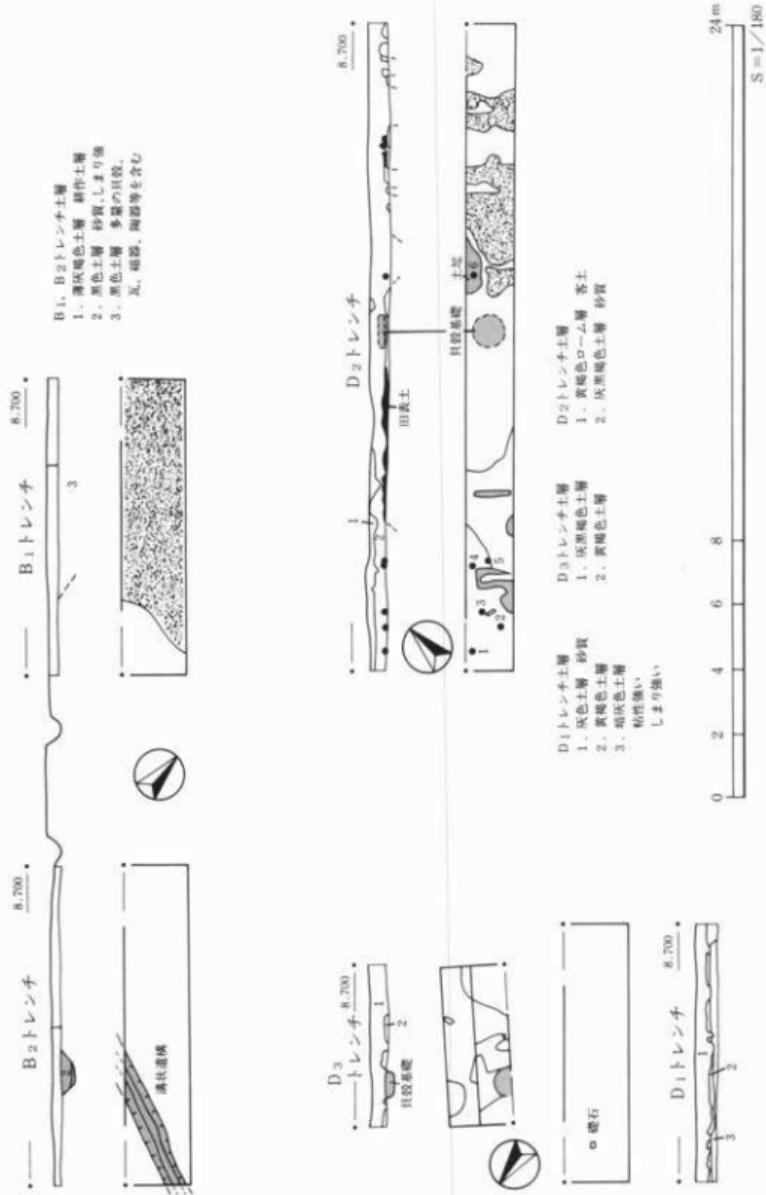
C<sub>1</sub>トレンチでは瓦が1点のみ、C<sub>2</sub>トレンチでは平瓦3点、陶器1点、土師質土器片1点が出土した。

#### ④D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>、D<sub>3</sub>トレンチ

小字は本丸である。古絵図によれば旧飯野県庁建物付近に当たる。旧県庁の施設は明治維新前の保科家の屋敷をそのまま利用したと考えられるので、即ち本丸建物付近に相当すると考えられる。D<sub>1</sub>、D<sub>2</sub>トレンチとD<sub>3</sub>トレンチの間の飯野神社参道は大正年間に拡幅造成されたものである。D<sub>1</sub>、D<sub>3</sub>トレンチの土層は黒色の旧表土上に、硬く締まりの強い暗灰色土、黄褐色の砂盛土層が続き、その上に厚さ40cm~50cmの黒灰色砂層がある。黒色の旧表土上ではかなり湿気を帯びており、直下で冠水すると思われる。D<sub>2</sub>トレンチはトレンチ南側では表土上面に黄褐色ロームと灰黒色土との混合土層がみられるが、これは現在この地点が植え木煙として利用されていることから、他の地域から移動した客土と考えられる。基本的には黒色の旧表土上に約50cmの厚さで灰黒褐色の砂質土が堆積している状態である。D<sub>1</sub>トレンチ北側で建物の礎石と考えられる立方体の石材が検出された。D<sub>2</sub>トレンチではアサリの貝殻と瓦片を圧したものが、幅90cm、厚さ20cmの範囲で検出された。この遺構は中央がやや窪んだ状態であり、これは一般に行われていた建物の基礎の痕跡と思われる。また南側隅より貝殻や瓦を多数含むビットを検出した。D<sub>1</sub>トレンチでは貝殻片の検出はほとんど見られない。D<sub>2</sub>トレンチ北側では多くの擾乱が見



I-4図 飯野陣屋三の丸跡(三条塚周辺)発掘区平面図・断面図



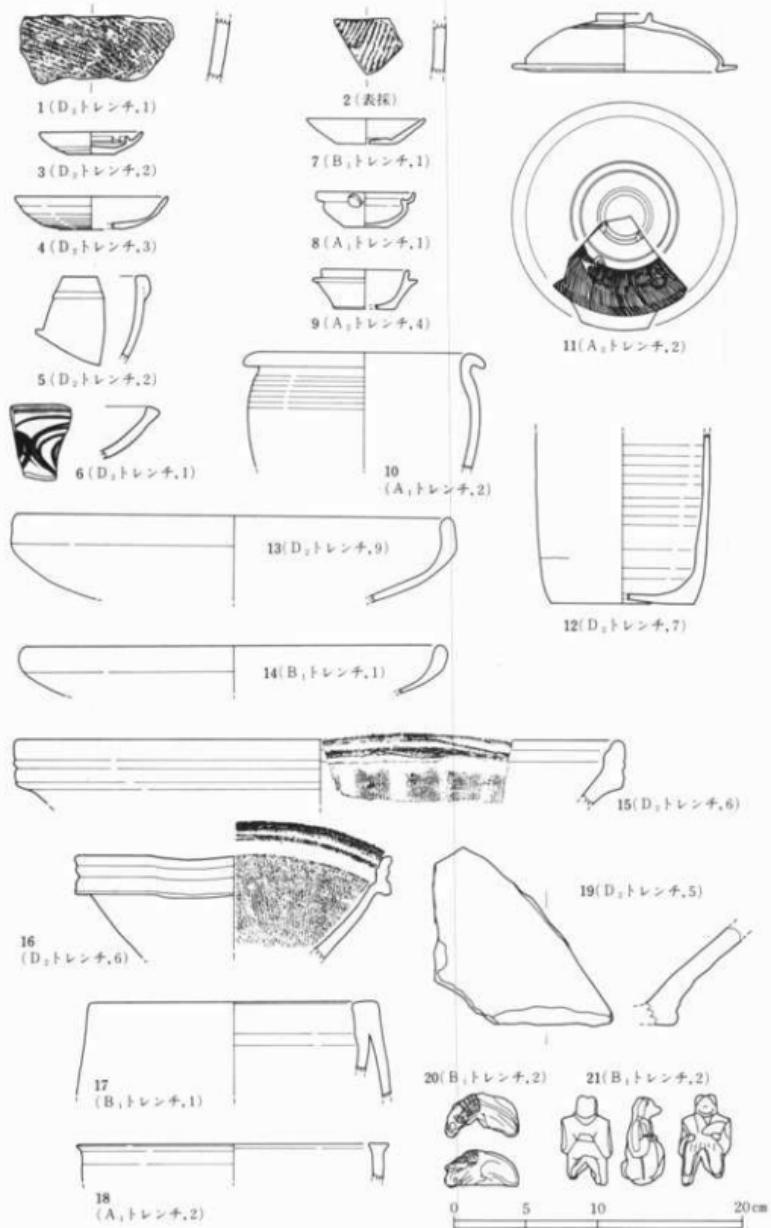
I-5図 蔵野陣屋本丸跨堀区平面図・断面図

られるが、覆土から見て最近のものであろう。トレンチ北端より7m50cmのところでピットを検出した。図版中のプランはトレンチ最下面でのものであり判然としないが、断面観察によれば不整形の堀方で堀方面に赤褐色の鉄分の沈着が見られる。また、すぐ南側では図中の破線部分に圧された貝殻塊があったが、誤って調査中に除去してしまった。D<sub>3</sub>トレンチで同様の貝殻塊が検出されており、建物の基礎部分であった可能性が強い。トレンチ南側では絞まりの強い薄い灰色の砂層が帶状に数か所で検出された。これについては性格は不明である。聞き取り調査によれば、この付近に最近まで建物があった事実ではなく、古絵図中の位置からすると、本丸建物跡と考えるのが最も妥当と判断される。ただ調査は一部でありその規模はわからない。何れのトレンチでも旧表土を検出したが、みな温氣を帯びており泥炭化している。陣屋築造以前は湿地帯で、当時かなりの土を盛ったと考えられる。

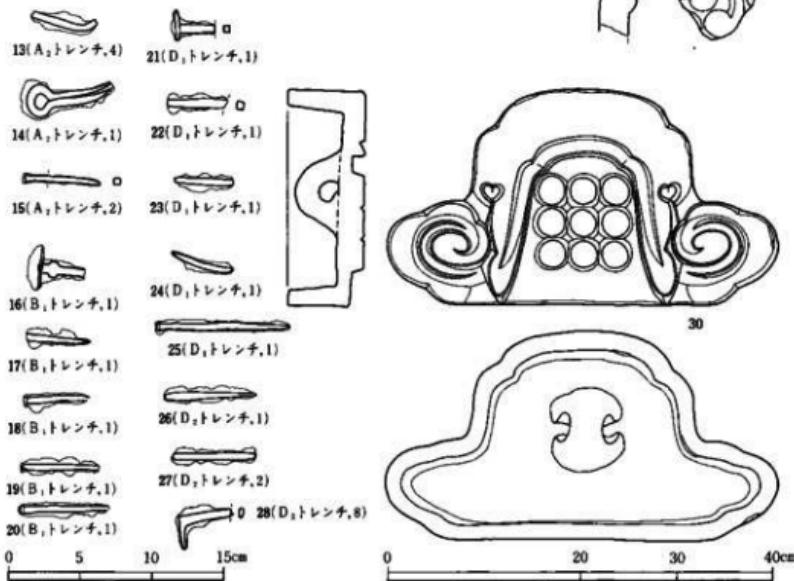
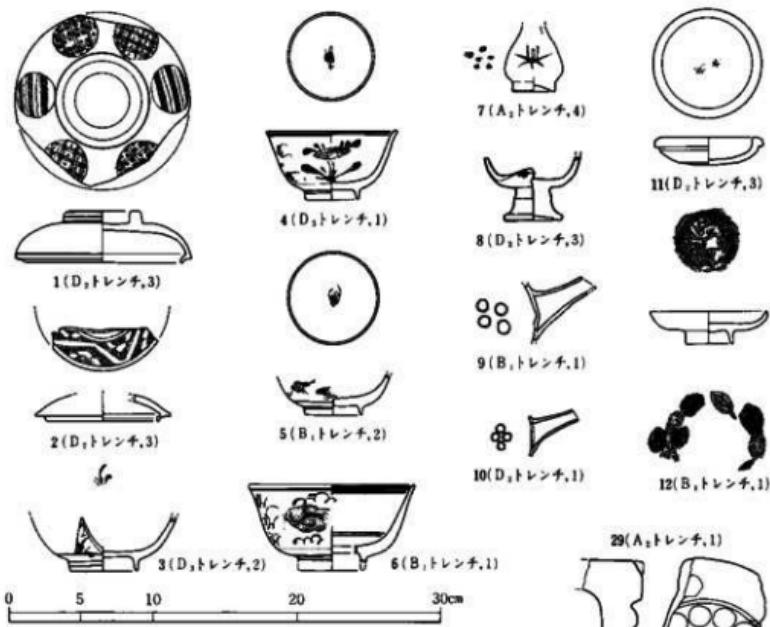
#### 遺物

磁器、陶器、瓦片が出土している。(I-7図、4)は伊万里染付小型碗で18C末~19C前半、(I-6図、6)は瀬戸・美濃産の通称「馬の目大皿」と呼ばれるもので19C代、(I-6図、3)は瀬戸・美濃産の燈明皿で鉄軸が掛けられており18C後半から19C代、(I-6図、5)は瀬戸・美濃産の灰釉鉢で19C代、(I-6図、12)は瀬戸・美濃産灰釉徳利で回転ヘラ削り痕が明瞭である。(I-7図、1・2)は染付碗の蓋で18C後半~19C前半のもの、(I-6図、15・16)は外面無釉の焼き締め陶器鉢で備前か信楽系統か、(I-6図、19)は常滑系の甕の底部片で、他に數点出土しているが時期は不明。(I-6図、4)は瀬戸・美濃産の鉄軸皿、(I-7図、10)は陶器急須注口部、(I-6図、13)は土師質であるが硬質の鉢である。(I-7図、8)の伊万里染付仏龕具は18C代のもの、(I-7図、21~28)は釘類、(I-6図、1)はS字状結節が明瞭に見られる。繩文中期初頭か。

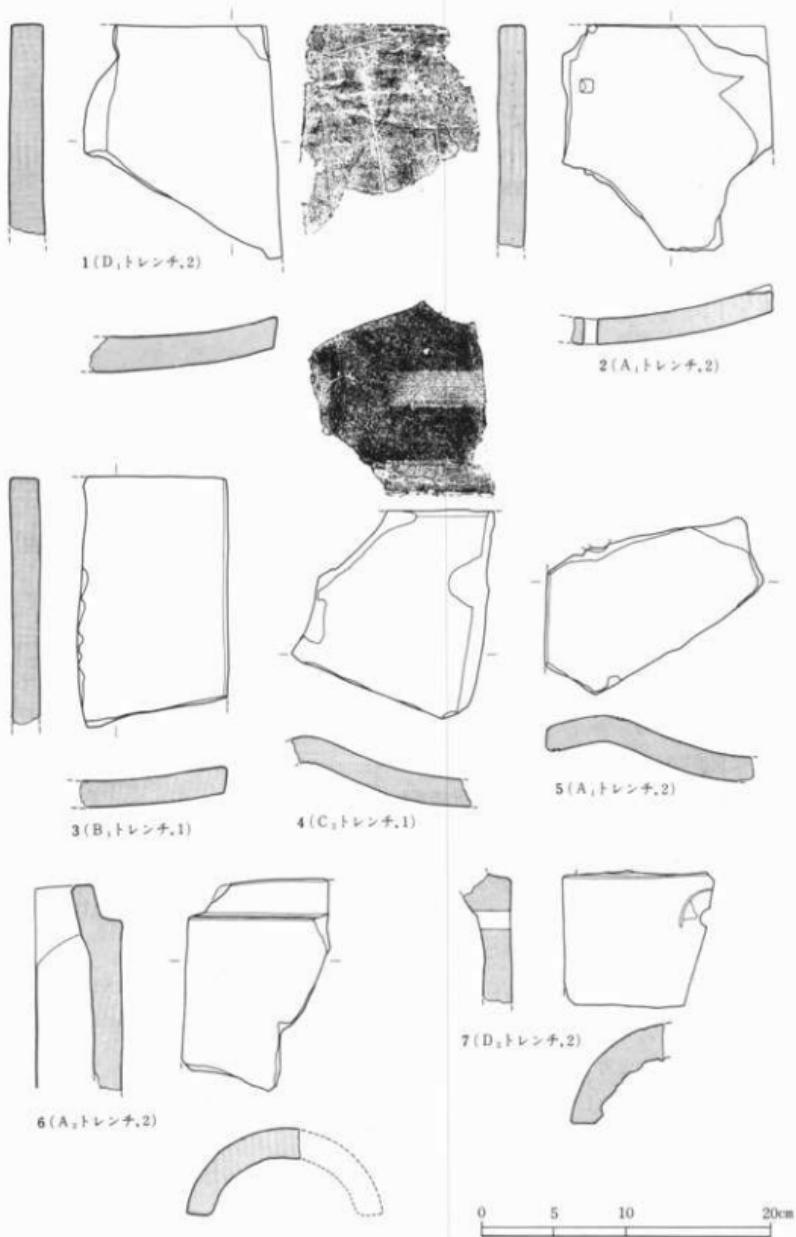
(注)ここで言う古絵図とは國學院大学図書館所蔵のもので、他に複数の種類の絵図がある。当絵図の記載時期は旧飯野県の県庁がおかれていた明治四年にあたる。



I-6図 飯野陣屋跡出土遺物実測図（縄文式土器、須恵器、陶器、土人形等）S=1/4



I-7図 磐野陣跡出土遺物実測図（磁器、陶器、鉄製品、瓦）S=1/4、1/6(30)



I-8図 飯野陣星跡出土遺物実測図（瓦）S = ¼

## 5. 結語

測量調査、発掘調査の結果および古絵図による復元から以下に要点を述べる。

### 測量調査

①規模 本丸 長軸210m、短軸160m、面積34,000m<sup>2</sup>

二の丸 面積31,000m<sup>2</sup>

三の丸 面積51,000m<sup>2</sup>

外濠外縁以内の内部面積 128,000m<sup>2</sup>

外部面積 48,000m<sup>2</sup>

②本丸大手門跡形は一部で残存する。(中村博氏宅)

③本丸と二の丸との境の土塁はほとんど削平されている。内濠は一部で残存する。(山田留吉氏宅横)

④二の丸と三の丸との境の内濠は一部で残存する。(八田英夫氏宅)

⑤道路については遺存状況は良い。

⑥煙硝倉・稻荷塚・牢屋については不明。

⑦外部の輪郭、道路部分は現在でも復元できる。

### 発掘調査

①三条塙外周溝を確認した。すなわち、飯野陣屋跡外濠の一部は三条塙外周溝を利用していることが判明した。

②出土遺物は19世紀代のものがほとんどである。

③陣屋築造に当たっては部分的に盛土造成している。

④建物(本丸藩主邸)の基礎部分の検出。

⑤二の丸と三の丸との境の内濠の検出。

⑥については平面的には重なるものの、堀方の規模は陣屋外濠の方がかなり大きいので、濠を造る際にはかなり掘り下げたものと考えられる。

⑦については、藩主・家臣とともに平素は江戸の上屋敷に在住しており、飯野には余り居住しなかったが、明治維新後は藩主や家臣、旗本が陣屋に戻って居住していたことと密接な関連があるものと考えられる。

⑧については泥炭化した旧表土層があり、今でもこの層位で冠水することから、部分的に湿地帯となっていたところがあったと想定される。

⑨についてはアサリの貝殻を圧したるものや、角型の石材をつかったものが検出された。

⑩については三条塙の二重周溝の外周溝外縁を内濠としていたことが想定される。

飯野陣屋は江戸時代より日本三陣屋の一つと呼ばれてきた。その中にはすでに消滅したものもある。飯野県が明治四年木更津県に併合されてからは、建物はほとんど取り壊され、以後、家臣や旗本の子孫も現在当地には数軒残っているのみと聞いている。しかし、折からの歴史ブームにより観光バスで見学に来る人々も最近見かけられるという。内裏塚古墳群と併せ貴重な文化遺産として後世に残していきたいものである。

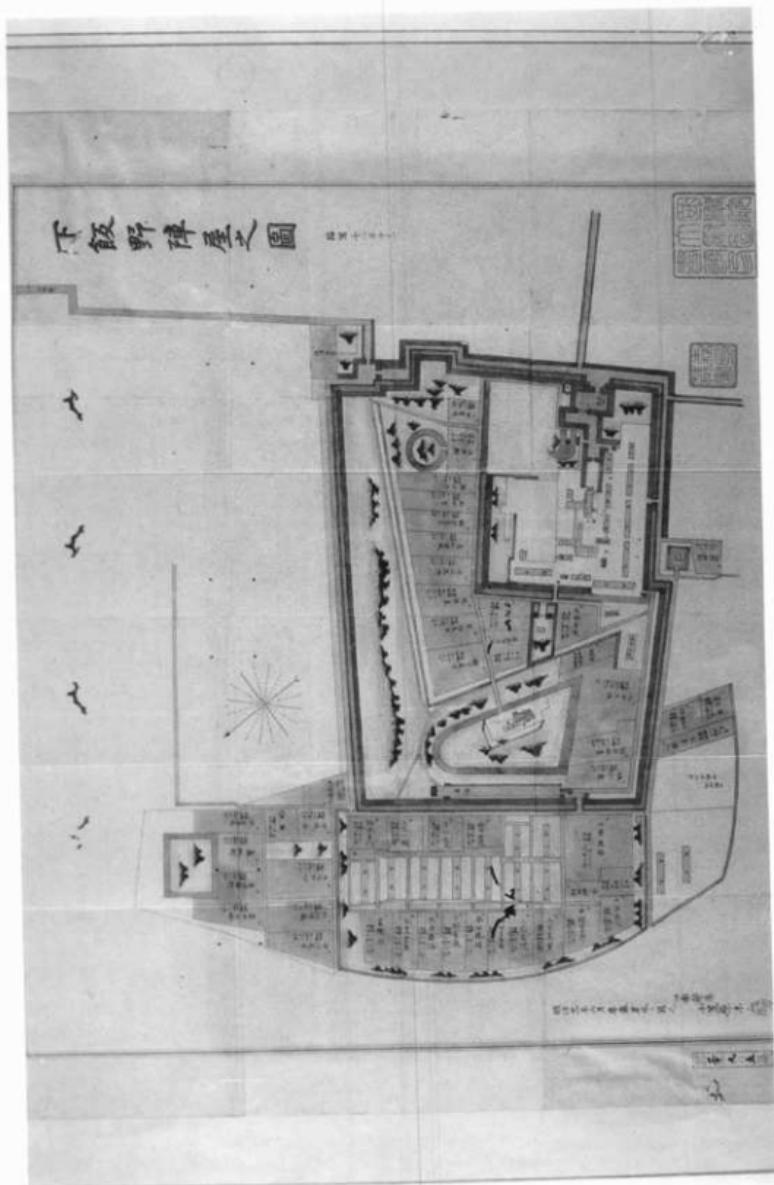
#### 引用・参考文献

- ①「上総国町村史」小澤治郎佐衛門 明治22年
- ②「富津市史 史料集2」昭和55年8月7日 富津市
- ③「千葉県史料・近代篇 明治初期」昭和43年
- ④「千葉縣君津郡誌 下巻」昭和2年
- ⑤「千葉県富津市飯野陣屋稻荷口遺跡調査報告書」昭和57年 稲荷口遺跡調査会
- ⑥「飯野陣屋遺跡発掘調査報告書」昭和60年3月 富津市教育委員会
- ⑦「千葉県富津市内裏塚古墳群測量調査報告書」昭和61年3月 千葉県教育委員会
- ⑧「関東の城」探訪ブックス 小学館
- ⑨ ⑤と同じ
- ⑩ ⑥と同じ
- ⑪ ⑤より引用、( )は筆者注
- ⑫ 八田英夫氏による
- 「二間塚遺跡群確認調査報告書」昭和59年3月20日 富津市教育委員会  
財団法人君津郡都市文化財センター
- 「二間塚遺跡群確認調査報告書II」昭和60年3月 富津市教育委員会

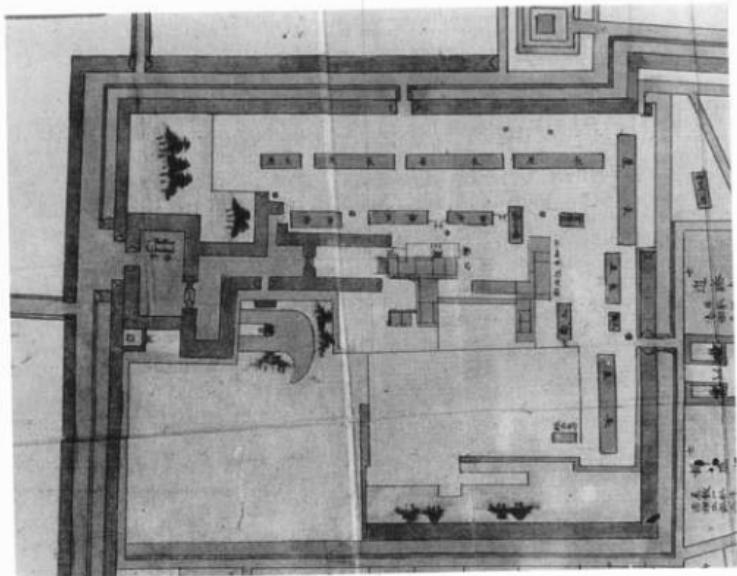
# 写 真 図 版



飯野陣屋跡航空写真 (1/13,000)

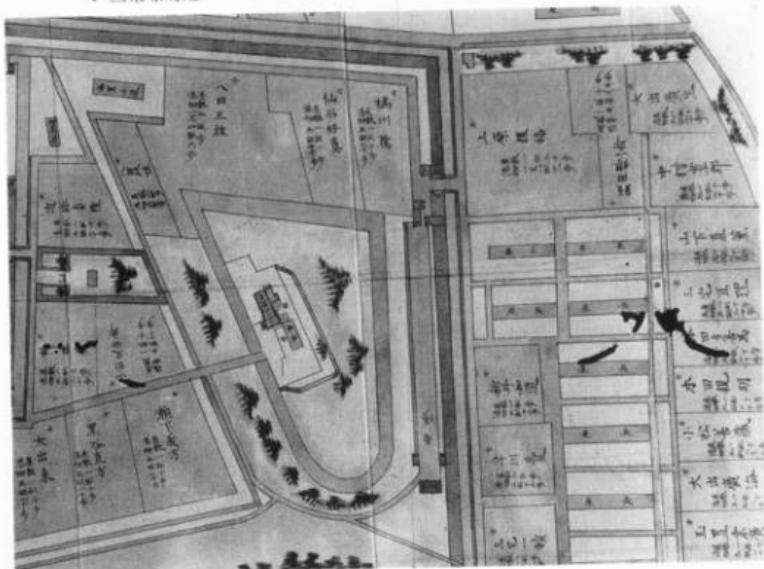


飯野陣屋古絵図（国学院大学図書館所蔵）



▲ 本丸

▼ 三条塚周辺

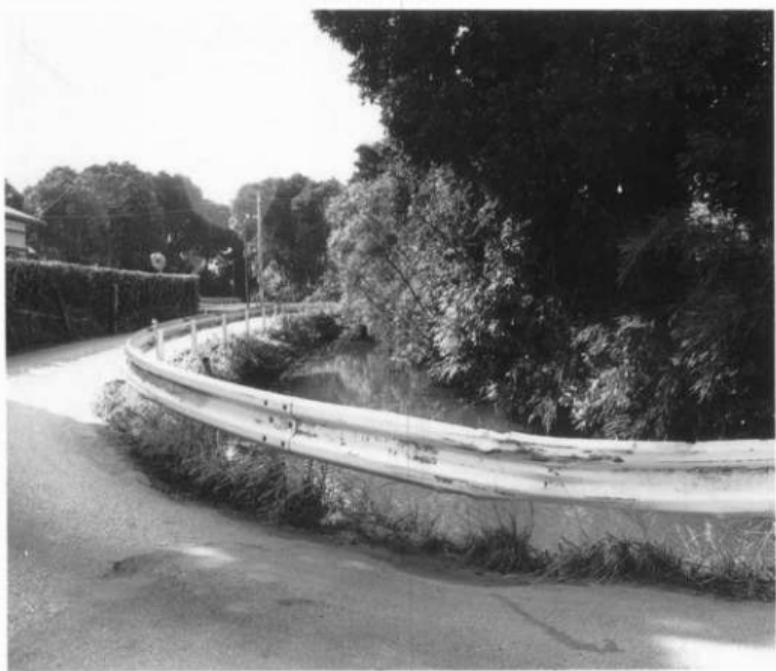


飯野陣屋古絵図（國學院大學図書館所蔵）



▲ 大手門南側（南東より）

▼ 北東隅樹形（北より）



飯野陣屋跡遠景・近景



▲ 三条塚前方部外周溝(手前)、溝状遺構(奥) (A<sub>2</sub>トレンチ)

▼ 三条塚前方部外周溝 (A<sub>1</sub>トレンチ)



飯野陣屋跡三の丸 (三条塚前方部南側) 確認遺構

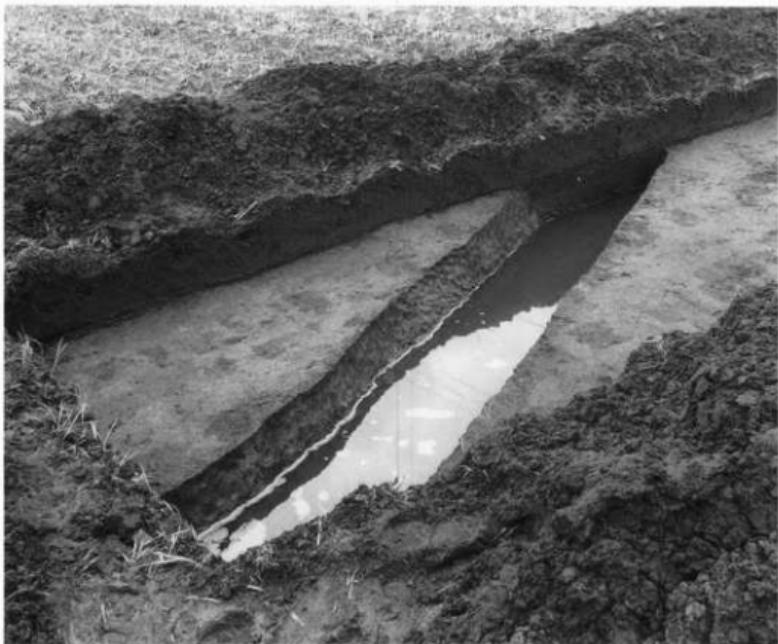


▲ C<sub>1</sub>トレンチ(奥), C<sub>2</sub>トレンチ(手前) 確認状況

▼濠(三条塙後円部外周溝)断面(C<sub>2</sub>トレンチ)



飯野陣屋跡三の丸(三条塙後円部東側)確認遺構



▲ 溝状遺構（B<sub>2</sub>トレンチ）

▼ B<sub>1</sub>トレンチ確認状況



飯野陣屋跡本丸（B<sub>1</sub>, B<sub>2</sub>トレンチ）確認遺構



▲ D<sub>2</sub>トレンチ確認状況

▼ 遺物出土状況 (D<sub>2</sub>トレンチ)



飯野陣屋跨本丸 (D<sub>2</sub>トレンチ) 確認遺構



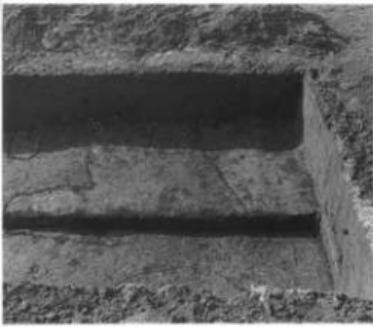
▲ 遺構確認状況（D<sub>1</sub>トレンチ）



▲ 遺構確認状況（D<sub>1</sub>トレンチ）



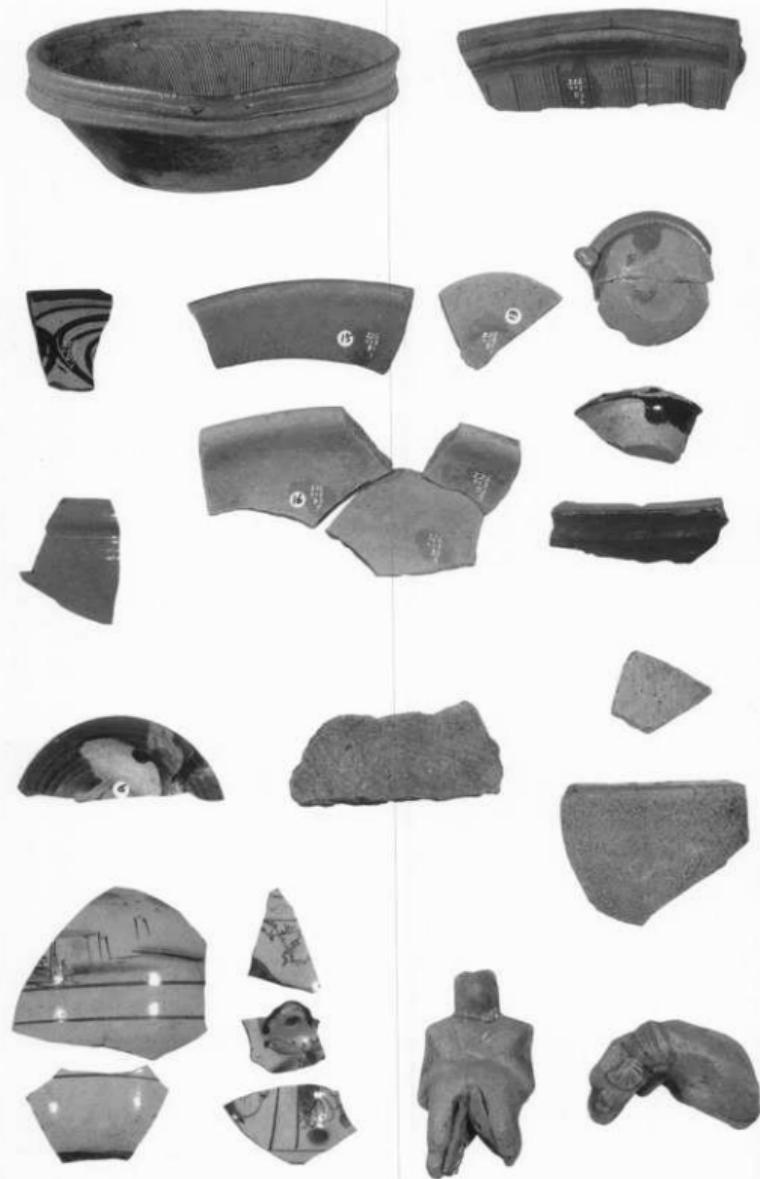
▲ 遺構確認状況（D<sub>3</sub>トレンチ）



▲ 貝殻基礎部分（D<sub>3</sub>トレンチ）



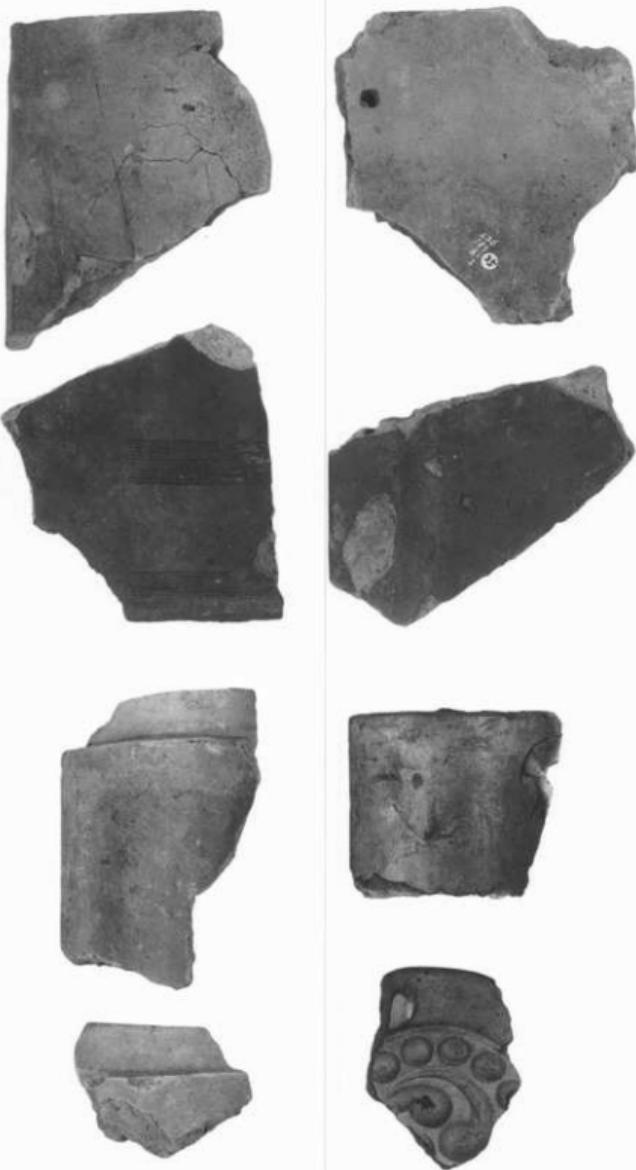
飯野陣屋跡本丸（D<sub>1</sub>, D<sub>3</sub>トレンチ）確認遺構



飯野陣屋跡出土遺物



飯野陣屋跡出土遺物



飯野陣屋跡出土遺物

## II 佐原市山崎城

### 1. 山崎城の位置と地理的環境

山崎城は佐原市香取丁子に所在する。JR 東日本成田線香取駅より南へ約 1 km の所に位置する。城は北東に延びる半島状台地の西側に突出した尾根先端部に立地し、北は津の宮、利根川から水郷潮来を眺望し、西側の開せき谷を境に南北には香取神宮を見ることができる。利根川は治水工事によって現在のような流れとなっているが、近世以前は香取の海と呼ばれ利根川が付近の台地に入江のように入り込んでいた。海拔は水田部で 4.5m、郭部で 24m、最も高い部分で 32m を測る。比高差は最大 27.5m である。台地を構成する下総層群の砂層は「佐原砂」と呼ばれ、工業用材として大規模な採掘が行われている。總じて関東ローム層の薄い地域である。現在城跡は台地上が杉林となり、城跡を含む丁子地区が風致地区に指定され環境保全されており、全体の遺存状況も良好である。

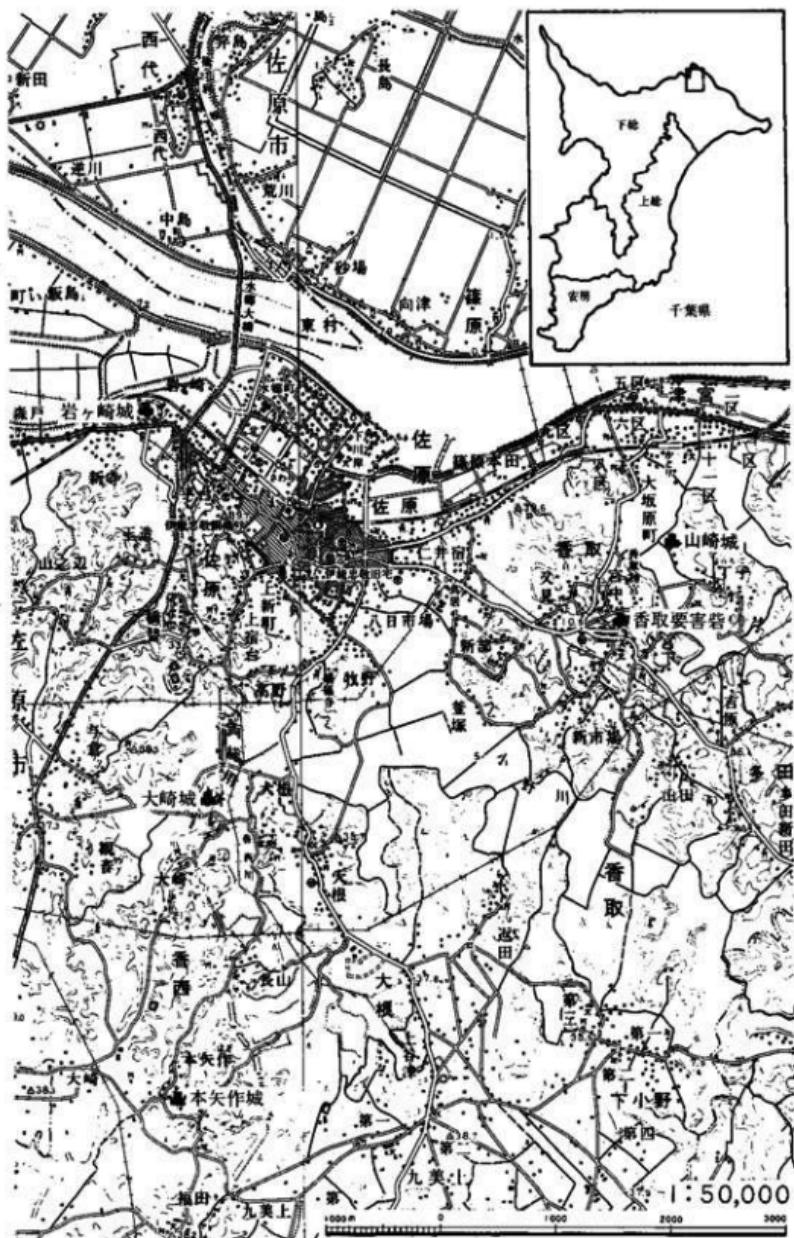
### 2. 山崎城の歴史的環境

山崎城のある佐原市は、香取神宮が所在することで著名である。また当地区の古代・中世史を語るうえで香取神宮との関係を無視することはできない。中世に限っても県内では珍しく神宮関係の中世文書が多く残されており<sup>(1)</sup>、文献史学の研究成果も県内の他地域に比べれば格段に多く発表されている。さらに、山崎城は香取神宮から北東に谷津を隔てて僅か 700m の距離に位置することからも、神宮との関係は密接なものであったことがうかがえる。

香取神宮は、鹿島神宮（茨城県鹿島郡鹿島町）と共に古代においては律令国家の東国經營の拠点として位置付けられ、律令国家から手厚く保護され香取郡を神郡として与えられていた。さらに平安時代にはいると、香取社を氏神とした藤原氏の政治的進出に伴い、位階を高め元慶 6 年（882）には正一位となり、「延喜式」では神宮と称され、香取社家の大禰宜家を中心に香取社領を拡大し、政治的・経済的に当地区では飛び抜けた存在となった。

しかし、王朝国家から武家政治の始まりである鎌倉幕府の樹立と共に香取神宮のおかれ立場にも大変動が生じることとなった。当地区には、鎌倉幕府樹立に多大な貢献をした千葉常胤の五男国分胤通が相模郷（現佐原市大根）に地頭として入部し、従来の権力者の庇護を失った香取神宮に対し、新たなる権力者側の国分氏が香取社領への侵略を企てる。

山崎城が所在する丁子地区についてみてみると、正安 2 年（1300）には摂政前太政大臣（二条兼基）家政所下文に「当社神領渡田屋敷丁子…略」とあり、この頃はまだ香取社領であったことが確認できる。さらに嘉元 2 年（1304）には丁子地区が葛原牧に含まれていたことがわかる。しかし徳治 3 年（1308）の関東下知状に丁子孫三郎頼幹の名がみえるが、この人物は千田



II-1図 山崎城と周辺の主要城跡位置図

莊（現香取郡南部の多古町周辺）の地頭代であり、千葉氏の被官である中村氏のことと、このころ下総守護千葉氏の勢力を背景に香取社領であった丁子地区を横領したものと思われる。中村氏は以後南北朝時代にはいっても父子二代にわたって香取社領の侵略を行った。慶応元年（1389）には、千葉介満胤が丁子内の大応寺を「貞胤、氏胤三代」の「仏陀施入之地」とし、香取神宮側に千葉氏の長年の支配権を主張し、同年神宮側は大応寺の件と共に、丁子の中村氏の屋敷地を認めている。このことから、丁子地区は南北朝末期の頃には千葉氏の香取社領侵略のための拠点の一つであったと考られる。室町時代にはいると、丁子地区に関する文書が少なく香取神宮との関係がいま一つ不明確となる。寛正6年（1465）香取社神宮の田所氏代々が相伝した屋敷地が当地区に所在していたことが確認され、香取社領が部分的に存在していた可能性もある。しかし、鎌倉時代初めに香取郡に入部した国分氏が室町時代から戦国時代にかけて千葉宗家の衰退と相俟って在地支配力を強め、小野川（現在佐原市街地を流れる）の上流部から中流部に本拠を（大崎城）に移し、下流部（佐原市街地）から香取神宮にかけて進出している。文明年間（1469～86）頃には香取大福宣家宛の安堵状から見て、香取神宮に対する支配権は千葉宗家から国分氏の手に移ったと考えられる。国分氏は戦国期には利根川沿いの香取・海上地区（佐原市周辺）では最大の勢力を有し、香取神宮の支配権と共に丁子地区へも勢力を及ぼしていたと思われる。山崎城は後述するようにその構造が16世紀後半のものと考えられることから、香取神宮との関係以上に国分氏との関係を考える必要がある。山崎城に關係すると思われる文書は、文明4年（1472）の年号を持つ真福寺蔵文書<sup>(※XXIII)</sup>で「山崎之城之コシ」とある。「城之コシ」は「城ノ腰」であり、現在県内の多くの中世城跡に残されている地名の一つである。また山崎城の近辺には他に中世城跡が確認されていないことからも、真福寺蔵文書に見える「山崎之城之コシ」は山崎城を示すものであり、かつ文明4年（1472）にはすでに機能していたと考えられる。ただ現在見ることのできる山崎城はあくまでも16世紀後半の構造であり、文明4年段階にはもっと簡素な構造であったろう。

国分氏は戦国期大崎城（=矢作城、佐原市大崎）を本拠とし領地支配を行っている。大崎城は昭和59年千葉県教育委員会によって測量と遺構確認調査が実施されている。城跡は半島状台地のほぼ全域を城域として、南北約800m、東西約300mを計り、香取地区では最大級の規模である。構造は4か所の郭からなり直線連郭である。それぞれの郭は空堀で区切られ、櫓台、土塁、腰曲輪等の遺構が残されている。ただ同時期の同程度の規模を有する城跡と比較すると、構造的には技巧に富んだものとはいえない。香取神宮とは直線距離にして約4kmである。発掘の成果は小面積であると共に台地上の郭面の調査であったこともあり、僅かに15世紀と17世紀前半の陶器が若干出土した程度である。大崎城跡は当時の文献資料から16世紀末まで機能していたことはまちがいないことから、規模、機能面での違いや表面観察（測量調査）の限界があるが、山崎城も同様な時期に機能していたといえるであろう。大崎城には天正18年（1590）小田

原北条氏と共に滅亡した国分氏に替って徳川氏の家臣である鳥居忠元が入り、間もなくして岩ヶ崎城（佐原市岩ヶ崎）に移っている。岩ヶ崎城跡は小野川河口の佐原市街地西端の独立台地に占地しているが、遺存状態が良好でないこともあってかほとんど研究がされておらず、構造自体不明確である。ただ国分氏が最初に本拠地にしたと言われている本矢作城は小野川支流の香西川最奥部、次に本拠地とした大崎城が小野川流域の中程、近世大名の鳥井氏（岩ヶ崎城）が小野川河口部と段階を経て沖積地へと進出してくる動きは領主権力にとっての経済基盤、生産基盤の変化への対応でありかつ積極的な取組を表したものと言えるであろう。当然その動きは香取神宮が保持していた経済的、政治的権力の変化（減少）へ通じる。

香取神宮の経済的・政治的権力は平安時代が最も隆盛であったが、鎌倉時代に入り当地に入部した千葉氏中その一族・被官（国分氏、中村氏等）によって徐々に侵略を受け、南北朝頃には完全に武家側の力が勝ったようである。さらに武家側内部において香取神宮に対する支配権が下総守護千葉氏に替って当地では在地領主制を進展させた国分氏に委ねられ近世に至るまで続くことになった。この様な歴史の流れの中で、山崎城のある丁子地区は香取神宮と至近距離にあることから、早くから武家側の拠点の一つとなっていたが、山崎城との関連は不明と言わざるを得ない。理由としては城跡は15世紀後半には存在していたものの、現在見ることのできる構造は16世紀後半のものであるが、香取神宮や丁子地区の歴史が中世前半に比べ16世紀後半のほうが不明確なため関連付けて考えることが難しいからである。敢て山崎城の最終年代と関連させれば、永禄年間（1558～70）に、東上総から安房にかけての地区を基盤とした正木氏が、しばしば九十九里沿岸から当地へも侵略行動を取っており、香取神宮へも攻め込んだと言われている。現在香取神宮の南に隣接して香取要害跡跡が確認されているが、当時衰えていたとはいえ依然としてある程度の権力を有していた香取神宮が正木氏の侵略に対抗して神宮を要害化したものと思われる。また山崎城も城主である在地領主の権力を守るために、あるいは山崎城の地が香取神宮領であったならば、香取神宮本体を守るための防御網の一つとして、このころ大規模な改築を受けたのではなかろうか。

#### 注

- (1) 「千葉縣史料中世篇 香取文書」千葉県
- (2) 「香取文書纂」村岡良弼他編 明治40年 香取神宮所務所
- (3) 注(2)の文献卷十八、尚この文書については達山誠一氏（県立八街高校教諭）からご教示を得た

### 3. 山崎城の概要

丁子集落が乗る標高35m～40mの台地から北西方向に延びる舌状台地の先端に占地する。この舌状台地は台地基部側で北からの小規模な支谷によって鞍部を形成し、城跡が占地する台地はあたかも独立台地の様相をなしている。

城跡は台状部の一か所の郭と斜面から裾部にかけての帯・腰曲輪、平坦面等から構成される単郭の縄張りである。規模は台上部で北東～南西（短軸）50m、北西～南東（長軸）77m、裾部も含めれば短軸120m、長軸160mとなる。周辺の水田部との最大比高差は27.5mを測る。

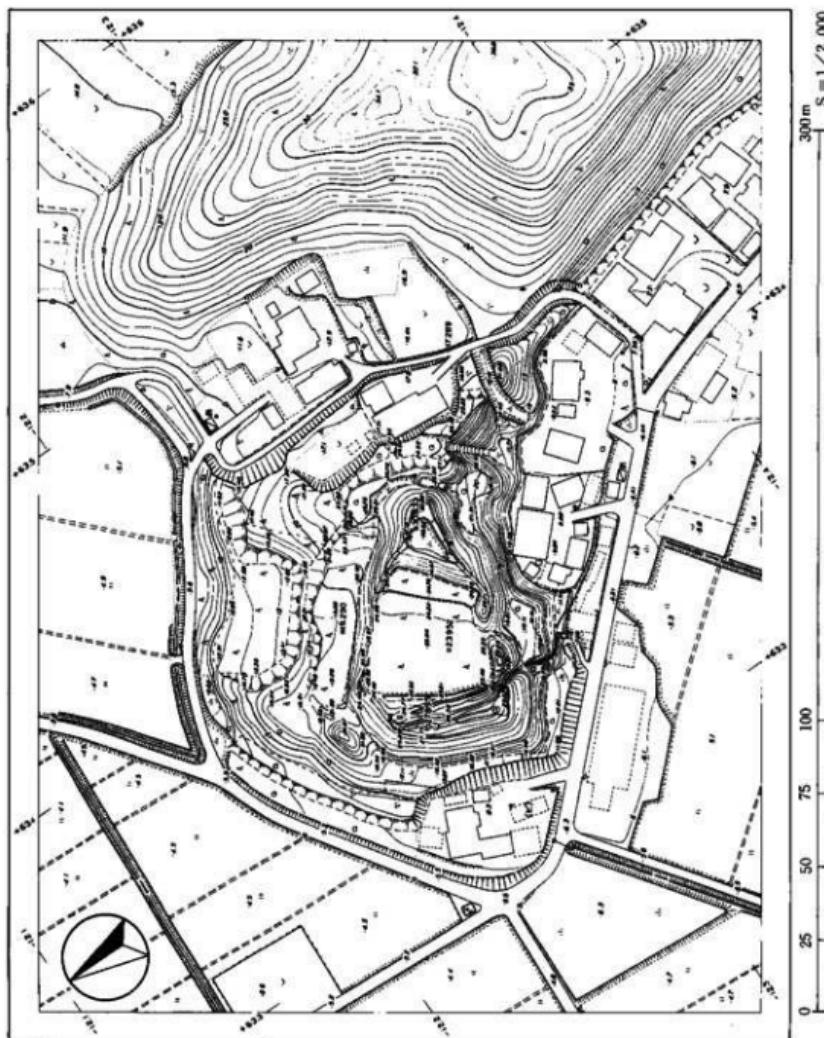
#### 台上部

台上部の大部分を占め近世城郭で本丸に相当する郭である（ア）は、一辺45mほどの台形状の平面プランをなし、標高24m前後のほぼ平坦な面である。郭は北東辺を除き土壘（イ・ウ・エ）と櫓台（オ）で囲まれている。北西辺にある土壘（イ）は最も大規模なもので、郭面より最大4mの高さを測る。ただ北側で側高神社によって内側が大分破壊されている。土壘（イ）と（ウ）の間は現在神社に通じる道となって開口しているが、従来はつながっていたものと思われる。しかし土壘（ウ）と（エ）間の開口部は腰曲輪（タ）とネコヤ地区（ニ）との関連から當時も開口し、虎口として機能していたと考えられる。

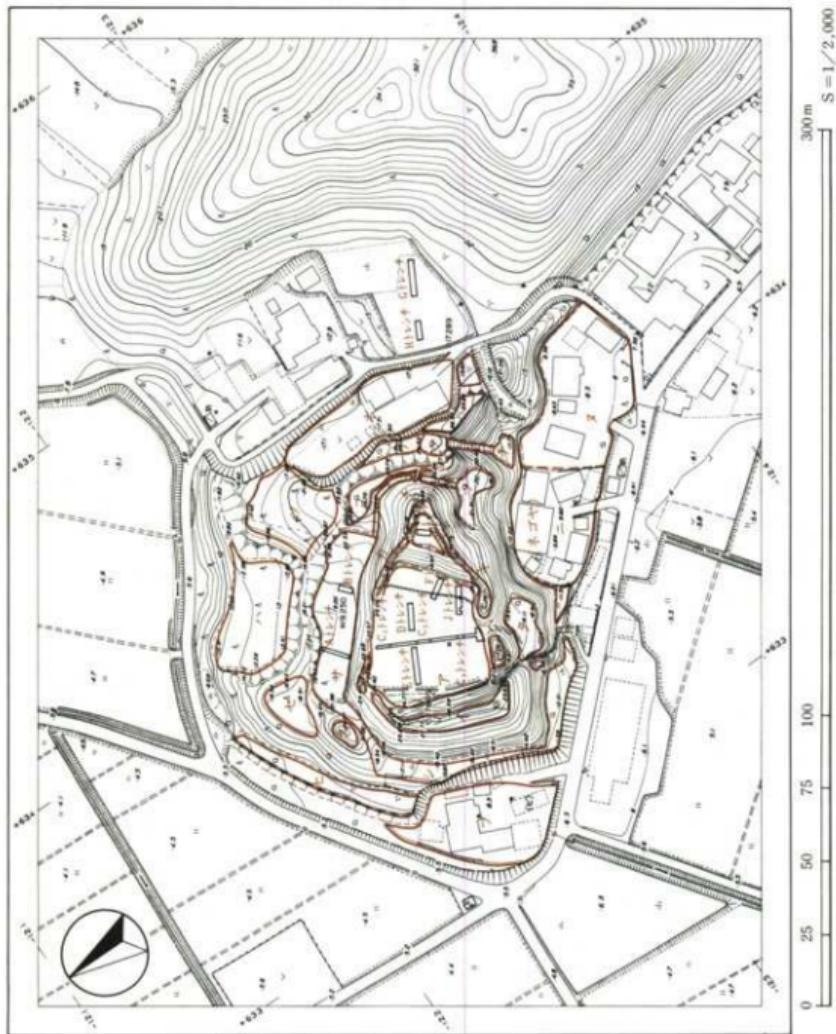
郭（ア）の北東辺は、現在土壘は若干の痕跡が認められるのみであるが、他の縁辺部の土壘や斜面部の遺構から見て、当時は土壘が巡っていたと考えられる。櫓台（オ）は標高32.6mと30.6mの二段からなり、郭（ア）からは6m～8m高い。長軸17m、短軸15mの規模で、三角形の平面プランである。台地基部から進入した敵に対して最後の防御拠点であり、台上部で最も高位な地点であることから、この地点を占領されたら即落城を意味するほど重要な場所である。櫓台（オ）からは土壘状に（カ）、（キ）が延び、それぞれ土壘に連続していたものと思われる。また（カ）、（キ）の造り方から築城前の自然地形は、櫓台（オ）を最高所に郭（ア）に向かって傾斜していたと思われる。築造時に最高所を極力残して櫓台（オ）として削り残し、郭（ア）はかなりの土壘を削りだし平坦面としたのであろう。

#### 斜面部

郭（ア）の斜面には帯曲輪・腰曲輪が郭（ア）をほぼ囲繞している。また台地基部に繋がる細尾根には2条の堀切をいれ台地基部と切断している。帯曲輪は堀切（ク）と（ケ）の間の帯曲輪（コ）を最高所（標高27m）として、逆時計周りに帯曲輪（サ）、（シ）と続き、徐々に高度を下げながら郭（ア）の東、北東、北西面を巡る。帯曲輪（シ）の南端は、標高10mまで下がっている。帯曲輪（サ）は標高19m～23m、奥行き10m～15m、（シ）は標高10m～18m、奥行きは8m（ただし、中央部は裾部の宅地化のため破壊され狭くなっている）ある。帯曲輪（サ）、（シ）は現状では空堀を伴っている痕跡は認められない。（ス）の高まりは帯曲輪（サ）、



II-2図 山崎城地形測量図



II-3図 山崎城概念図・トレンチ配置図

(シ)の中間にあり、両帯曲輪より5~6m高所で帯曲輪(シ)や腰曲輪(セ)を経由して進入する敵に対する防御拠点としての櫓台のような機能を持っていたものと思われる。帯曲輪(サ)の両端には一段下に(セ)と(ソ)の平坦面がある。(セ)は人為的に平坦面を造り出しているようなことから腰曲輪と見ることができるが、(ソ)の平坦面はなだらかな傾斜で自然地形と考えられることから、城郭遺構とは思われない。土壘(ウ)、(エ)の下には郭(ア)より4.5m低い標高で腰曲輪(タ)がある。長軸20m、短軸13mの規模を有する。台地基部を切断する堀切は(ク)と(ケ)の2条が認められる。櫓台(オ)の真下にある堀切り(ク)は上幅5mほどで北側には弧状に延び帯曲輪(サ)に続く。南西側には徐々に高度を下げ腰曲輪(ツ)となる。また中央部には土橋(チ)が認められる。この土橋を経由する通路は櫓台から見ると、土橋を渡って左へ行けば帯曲輪(コ)の北端、帯曲輪(サ)及び(シ)を経由して腰曲輪(タ)の下に至るので、土橋から右折し、帯曲輪(コ)の南端が堀切り(ケ)にやや食い込んでいる地点から堀切り(ケ)に下りるものと、2通りのルートが想定される。堀切り(ケ)は上幅8mほどで北東方向は堀底と同レベルで腰曲輪(テ)となり、南西側は堀部まで落差15mの豊堀(ト)となる。堀部には小規模な平坦面を有する。

#### 堀部

台地堀部は現在宅地や畠地として利用され、周囲の水田部より2m~12m高位の平坦面が認められる。大原徳重氏の宅地である平坦面(ニ)は郭(ア)の南側の下に位置し標高10mほどを測る。規模は長軸40m、短軸30m程である。大原氏の屋号を「ネゴヤ」と呼んでいることから、いわゆる「根小屋集落」と言われるような城下集落があった地区であろう。おそらく、平坦面(ヌ)も(ニ)より1.5mほど低位ではあるが城下集落地区と思われる。さらに、平坦面(ニ)は腰曲輪(タ)、土壘(ウ)、(エ)間の虎口を通じて郭(ア)に最短距離で結ばれていると共に、防御的に強化されている点を考えて、ここに城主の居館があったものと想定される。この様な主郭部と根小屋地区が密接した位置関係は、県内には本佐倉城跡(印旛郡酒々井町)、大椎城跡(千葉市)、飯櫃城跡(山武郡芝山町)等多くの例があり、根小屋地区を単に城下集落地ばかりでなく、城主の居館をも内包するパターンも存在していたことを考えさせる実例である。平坦面(ネ)は標高17mほどで、レベル的に見れば大規模な腰曲輪であろうが、堀切り(ケ)の外側に位置する点と、谷津内の平坦面(ノ)との比高差が4m程しかないことから、城下集落の中では階層的には城主に懸ぐものの屋敷地か、あるいは居館があった地区の可能性もある。谷津内の平坦面(ノ)は城下集落地区であったろう。平坦面(ハ)、(ヒ)は人為的な削平を受けていることは確かであるが、(ハ)は緩斜面であるとともに、(ソ)が自然地形であることから城郭遺構とは考えにくい。また、平坦面(ヒ)はレベル的に低い(標高12m)ことと奥行きが5mほどしかないことから、やはり城郭遺構ではないと考える。平坦面(フ)は現在宅地として利用されているが、帯曲輪(シ)を破壊していることを考えれば、城が機能していた当時は

全くといっていいほど平坦面はなかったであろう。

#### 4. 発掘調査とその概要

##### (1) 調査経過と方法

発掘調査は昭和62年11月18日から11月30日まで実施した。郭部を中心に北東側の帯曲輪部、そして櫓部と、城下集落地区にトレントを設定した。郭部では虎口から帯曲輪へ向かって（Cトレント）を、それに直交するように2本のトレント（Eトレント、Dトレント）、郭部でも一段高くなっている地点に2本のトレント（Fトレント、Jトレント）を設定した。また、帯曲輪部では郭部に向かってほぼ平行の2本のトレント（Aトレント、Bトレント）を設定した。城全体が杉林や雜木林となっているため、トレント幅は1～2mと細長く、設定地点もかなり制約を受けた。また日中でも非常に暗いため土層観察や写真撮影は困難を極めた。そして城下集落地区には畠の中に2本のトレント（Gトレント、Hトレント）を設定した。

発掘調査はトレント設定後すべて表土層から手堀で行い、平面観察および断面観察を実施した。トレントは実測・撮影が済み次第すぐに埋め戻しをして、11月30日に現場作業を終了した。なお、遺構確認面まで1m前後の砂層を堀り抜かなければならないトレントについては、部分的な堀り下げにならざるを得なかった。

発掘調査の面積は全体で200m<sup>2</sup>である。

##### (2) 調査区の概要

###### 〈櫓部〉

二段の櫓部のうち一段低い位置にある約50m<sup>2</sup>と小規模な平坦面（オ）の中央に2m×5mのトレント（Iトレント）を設定した。

土層と遺構 表土下約5cmで薄い灰褐色砂層（地山）になる。遺構は全くない。

遺物 なし

###### 〈郭部〉

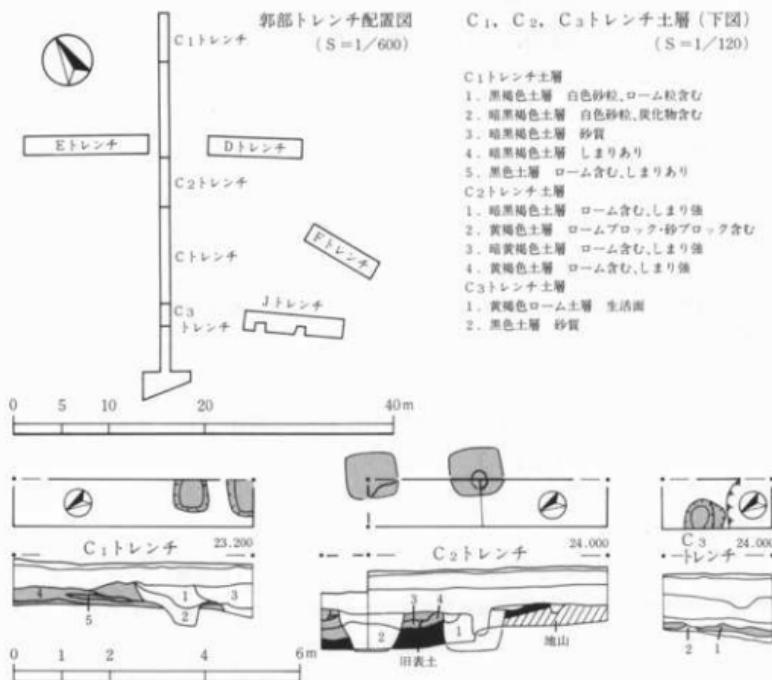
台形状の平面プランをしており緩やかに櫓から土壁に向かって傾斜している。標高は23m～24mである。この郭部にはC、D、E、F、Jの各トレントを設定した。Cトレントは遺構確認面まで1m近くあり、C<sub>1</sub>、C<sub>2</sub>、C<sub>3</sub>トレントとして部分的に堀り下げた。

###### 土層と遺構

地山は薄い灰白色の砂層で、その上に黒褐色の砂質土が30cm～1m堆積している。この両層の間に生活面が残存している。生活面は基本的にローム混在の黒色土で整地されており、C<sub>1</sub>トレントでは約20cmと薄いがEトレントでは50cm以上に達する。C<sub>2</sub>トレントでは旧表土が残存している。またEトレントでもトレント北端で旧表土を検出しており、このことからこの両トレントの間に小さな谷津が北側から入り込んでいることが考えられる。C<sub>2</sub>トレントで検出した掘

立柱建物遺構は盛土整地面を切って柱穴が掘られており、柱の抜き取り穴も明瞭である。堀方は直径1m30cm、深さ90cm、柱の直径35cmと規模は大きい。 $C_1$ トレンチのみでは建物の全体の規模は不明であるが、南側には拡がらず、北側にその中心があると推定される。 $C_2$ トレンチは地山まで完堀していないが、整地面を堀り下げてピット状の遺構が検出されたが、柱穴かどうかは判然としない。このことは $C_1$ トレンチ検出のピット状遺構にも言える。なお、 $C_1$ トレンチの生活面直上には20cm前後の厚さで焼土粒や炭化材を多量に含む層を検出している。 $D$ トレンチでは西側のサブトレンチで貼床状整地面が検出されているが、東側のサブトレンチでは検出されていない。 $F$ トレンチ、 $J$ トレンチでは東側で地山の砂層が表土層直下で露呈し、西側では急に落ち込んでいる。 $E$ トレンチでは先に述べたように盛土面が1m以上にも達しており、この状況から $D$ トレンチ西半から $C$ トレンチ、 $E$ トレンチを含む、現在残存する郭部でも西半分が、主とした生活の場であったことが考えられる。

なお、特に注目したいのは1、2層の堆積状況である。1、2層は城の盛土整地面を覆っている砂層であるが、檐台に近づくにつれて堆積厚が増しており、 $D$ トレンチでは1mに達する



II-4図 山崎城郭部発掘区確認遺構

が、逆にEトレント北端では30cmと薄い。そしてこの2層の直下に城の生活面が残存しているのである。即ち、下層の盛土面を堀り抜いている掘立柱建物が廃棄されてまもなく、橹台を崩して多量の土砂が郭部に流れ出したことになると想定される。そして、当時の郭部と橹台部との境はFトレント、Jトレント中にあったのではなかろうか。

一方、Fトレント、Jトレント内に見られる溝状遺構や多数のピットについては性格は不明である。Dトレント、Eトレントでも土坑状の遺構が検出されているが、極めて限られた確認調査ではその性格を判断することはできなかった。

#### 遺物（II-7図）

瓦、中世国産陶器、近世国産磁器、土鍋、砥石、かわらけ、土師器、宝筐印塔片、輪の羽口、鉄滓、軽石、古銭、金属製品、土錐、壁材、弥生式土器

図示できる遺物は少ない。（4）の瓦はCトレント南端の虎口付近で出土したものである。表面は灰色、断面は灰白色で、唐草文を施す。近世のものであろう。（7）はかわらけで底部には回転糸切り痕を残す。（9）は円板状の石材で砥石として使用したものであろう。（10）は土錐である。金属製品としては（13）（14）（15）の釘、（16）の鉄製の蓋や（12）の鎌がある。（11）は青銅製品で、両端に穴があけられていたようであるが用途は不明。鉄滓と輪の羽口はC、Hトレントからの出土である。出土層位は表土層中である。古銭は何れもEトレント内の盛り土層上面からの出土で、開元通宝以外ははり付いた状態であった。

#### 〈帯曲輪部〉

トレントを設定した帯曲輪は標高19m～24mを計り、当城跡においては最も明瞭に曲輪とわかる遺構である。トレントは2本（Aトレント、Bトレント）で、主郭の下端の線に直交するように設定した。トレント間の間隔は20mでそれぞれの大きさはAトレントが1m×10m、Bトレントが2m×5mである。

#### 土層と遺構

Aトレント、Bトレントいずれも地山までの堀り下げはできなかったが、細長く設定したAトレントでは盛土による土壠と埋没した空堀の状況が観察できた。空堀の規模は上端で9m、深さは推定5mであると思われる。

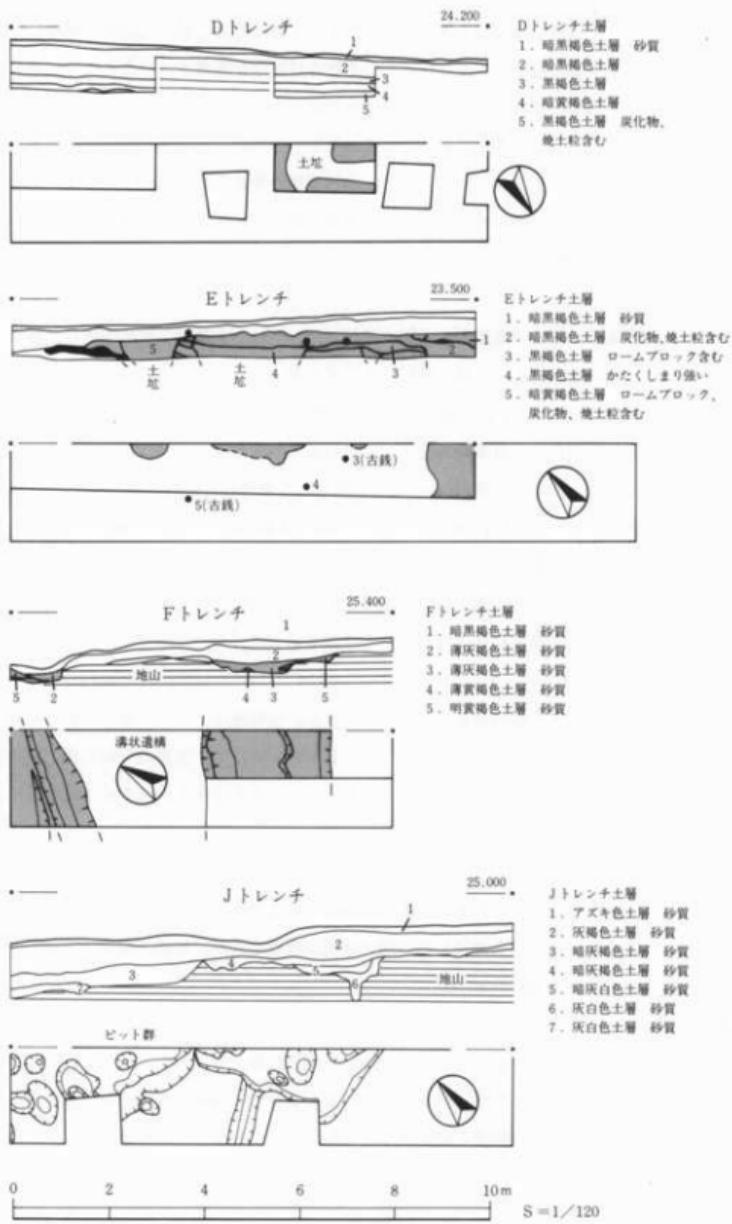
#### 遺物（II-7図）

中国産青磁、須恵器、土師器、中世国産陶器、土鍋、火鉢

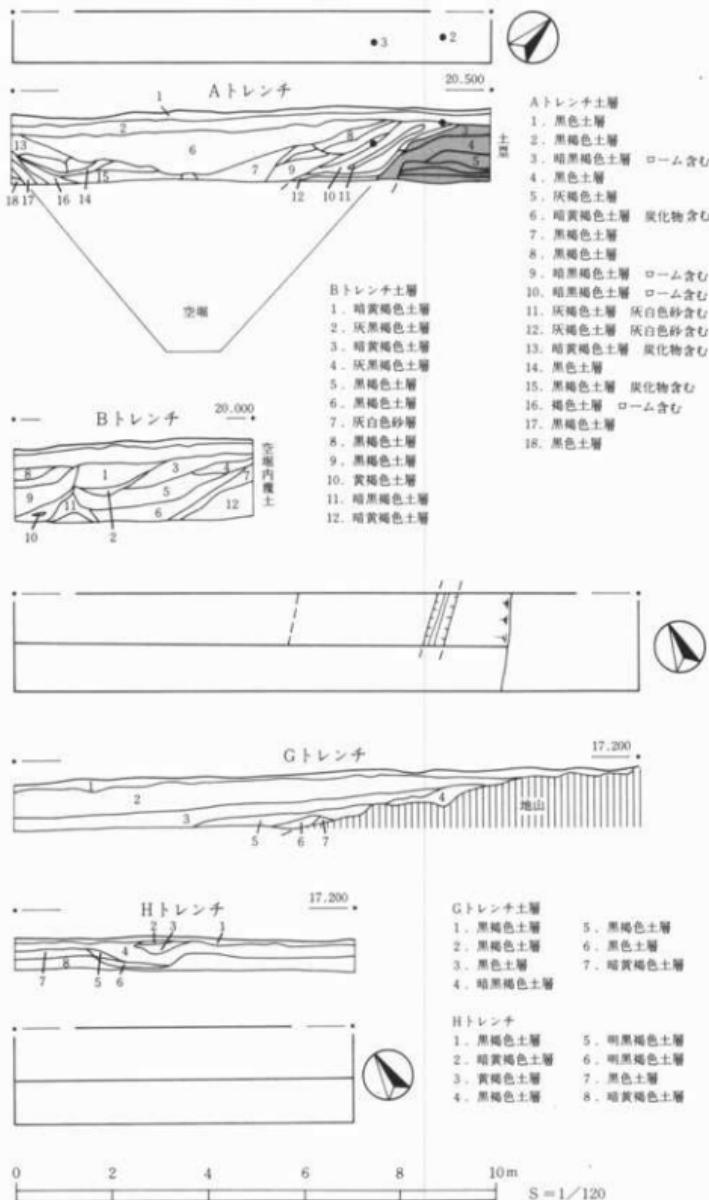
（5）は龍泉窯系の青磁である。体部より上は全く遺存していない。内面見込部にはヘラ削り痕が見られる。時期は14C前後と思われる。他に図示していないが、常滑の壺片が出土している。

#### 〈城下集落地区〉

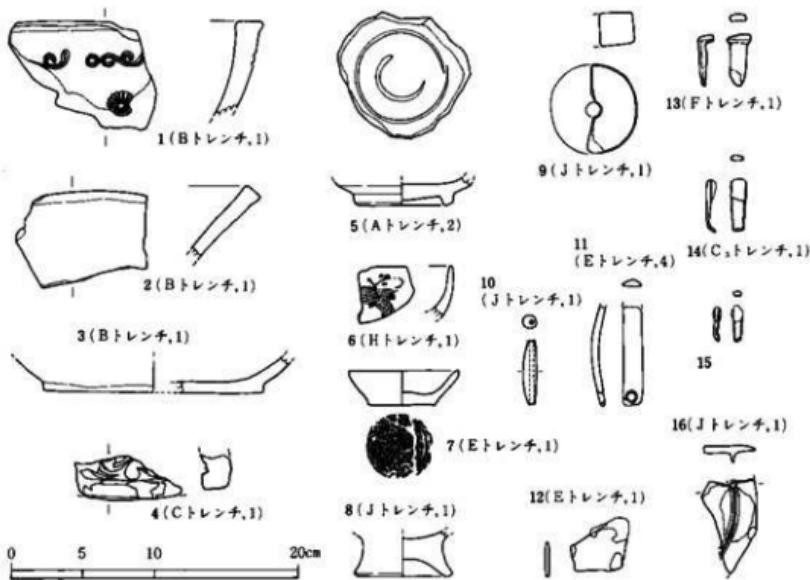
城と台地基部との間に北側から入り込む小さな谷津があり、その最奥部に位置する。現在は



II-5図 山崎城郭部発掘区確認遺構



II-6図 山崎城帶曲輪・城下集落地地区発掘区確認遺構



II-7図 山崎城出土遺物 S = 1/4

畠であるが、以前は梨園で、畠にする際にブルドーザーで表土を山際まで押している。なお梨園以前には民家があり、現在でもそのころの井戸枠が残っているということである。

当初ネコヤ地区であることを想定してGトレンチ、Hトレンチを設定した。トレンチの大きさはそれぞれ2m×13m、2m×7mである。

#### 土層と遺構

Gトレンチでは山際に近い地点で地山が検出され、それがHトレンチに向かって傾斜しているのが観察されたが、中近世遺構については全く確認できなかった。このトレンチの土層は自然堆積によるものである。Hトレンチでも同様で、一部に梨畠削平時の擾乱が見られるが、特に遺構は検出されなかった。

#### 遺物

中世国産陶器、土師器、かわらけ、磁器、土鍋、砥石時期等については何れも小片であり不明。

## 5. 結 語

要点をまとめると次のようになるであろう。

#### 測量調査

①規模160m×120m、最高標高32.5m、郭面と水田面との比高18m、舌状台地先端に占地する

表1 古銭一覧表(Eトレンチ出土)

(番号は図版II-7に同じ)

番号	遺物番号	銭貨名	外縁 外径(mm)	外縁 内径(mm)	内郭 外長(mm)	内郭 内長(mm)	重量 (g)	初鑄年
1	0005	開元通宝	23.7	—	8.1	6.1	2.2	621(唐)
2	0003	元豐通宝	24.5	17.9	8.1	6.4	3.4	1078(宋)
3	0003	大觀通宝	23.8	20.6	7.1	6.3	2.5	1107(宋)
4	0003	治平元宝	24.0	18.2	7.1	6.0	2.7	1064(宋)
5	0003	○○○宝	24.6	19.7	8.3	7.2	3.1	?
6	0003	天禧通宝	23.3	19.0	7.2	6.4	3.2	1017(宋)
7	0003	洪武通宝	22.8	18.9	6.9	5.6	3.6	1368(明)
8	0003	永樂通宝	25.0	20.0	6.6	5.4	4.0	1408(明)
9	0003	嘉祐元宝	23.4	17.3	7.6	6.1	2.9	1056(宋)
10	0003	至和元宝	23.8	17.3	5.9	—	2.7	1054~55(宋)

単郭構造の城跡である。

②遺存状況はかなり良好である。

③大規模な土塁、二重の堀切り、帯・腰曲輪の配置等から16C後半の繩張り（構造）と考えられる

④台地上の詰めの城（防衛拠点）と台地裾部の城下集落（居館も含む）のセット関係が明瞭に捉えられる。

#### 発掘調査

①郭部中央部に掘立柱建物が構築されていた。

②郭部は北側で盛土されているが、大部分は地山を削平して造成している。

③郭部生活面は東側の櫓部からと思われる大量の土砂に覆われている。

④郭部は盛土層からの出土遺物より中世末期以前の造成によると考えられる。

⑤北東側の帯曲輪には盛土による土塁と大規模な空堀がつくられていた。

遺構の残存状況が良好であるにもかかわらず、取り上げて時期を決定できる資料には恵まれなかった。これは極めて部分的な確認調査であるため致し方ないことである。強いて述べるならば、盛土整地層中から出土した古銭が最も新しいもので初鑄年が1408年であることが上げられるが、青磁については名品ではないものの伝世した可能性もあり判然としない。逆に城の構造から見ると16C後半と考えられるので、城の存続期間にある程度の幅を持たせなければならないかもしれないが、この点については今後の課題としたい。

現在では「山崎」という地名は地図上では消え、地区に語り継がれているのみであるが、城と共に地名もまた何らかの形で保存していきたいものである。

# 写 真 図 版



山崎城航空写真 (1/13,000)



▲ ネゴヤ地区(手前、南より)

▼(西より)



山崎城遠景



▲ 山崎城土塁(左際), 桶高神社(奥)

▼ 山崎城腰曲輪(左奥虎口)



山崎城土塁・腰曲輪



▲ Aトレンチ（郭部より）

▼ 青磁出土状況（Aトレンチ）



山崎城帶曲輪部発掘区・遺物出土状況

▼ Bトレンチ（郭部より）





▲ Cトレンチ（南より）



▲ C<sub>1</sub>トレンチ（北より）



▲ 挖立柱遺構確認状況  
(C<sub>2</sub>トレンチ)



▲ Eトレンチ（北西より）

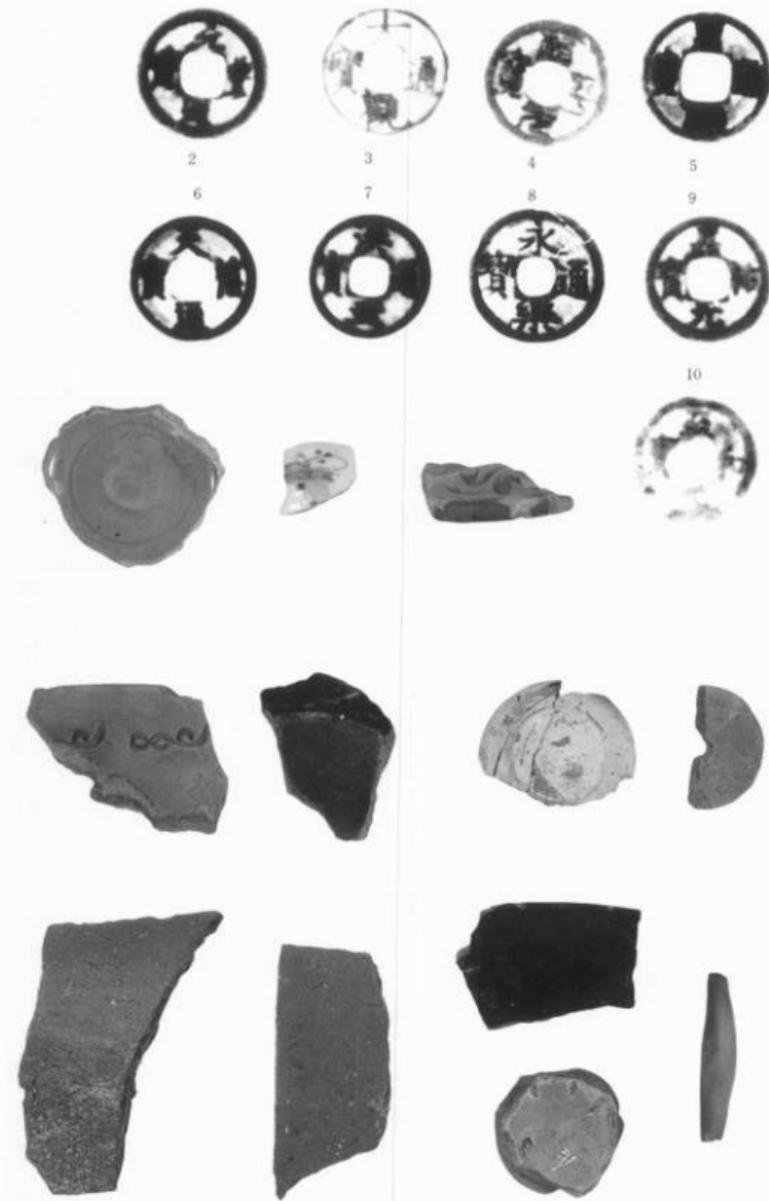


▲ Dトレンチ（北西より）



▲ Jトレンチ（北西より）

山崎城郭部発掘区



山崎城出土遺物

千葉県中近世城跡研究調査報告書 第8集  
—飯野陣屋跡・山崎城発掘調査報告—

---

昭和63年3月31日発行

発 行 財団法人 千葉県文化財センター  
千葉市葛城2丁目10番1号

印 刷 有限会社 正 文 社  
千葉市都町2丁目5番5号

---

本報告書は、千葉県教育委員会の承認を得て  
増刷したものです。